

---

# 転変世界のプラヴィタス

月草

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

転変世界のプラヴィタス

### 【Nコード】

N 8 4 4 8 Y

### 【作者名】

月草

### 【あらすじ】

夢も目標もない。頑張りたいことも特にない。空虚な日々を送ってきた少年——白上しろかみ 彩人あやとは今もその日々を送っていた。そしてこれからもそうやって生きていくつもりだった。そんな生き方をしていたから彼は何も得なかった。彼の人生は『白色』だった。ところがある冬の日、一人の少女との出会いが彼に『変化』をもたらす。少女は彩人とは似ているようで似ていなかった。白色の彩人とは違って、少女は白色に光沢を帯びた『銀色』をしていた。彼女は彩人の世界を変えた。それは彩人に白色な人生を彩ると同時に、

彼の世界を『異常』へと変えたのであった

## 序章

この世界は正常ではない。

ブラウイタス

『異常』がところどころに存在している。

でもほとんどの人々はそれに気付くことはできない。気付いているのは一部の者達だけ。

俺もその一人だった。

だった、というのはもちろん過去の話。

これが俺の運命だったのかもしれない。

ブラウイタス

一度でも『異常』と接触してしまえば、それは知ってしまったという事。知ってしまった以上『異常』に溢れた世界からは抜け出すことができない。

中にはただ夢でも見ていたんじゃないか、といった風に見過ごすことができる者も居るかもしれない。けどそう簡単に見逃すことはできない。

ブラウイタス

世界が正常な部分で生きている人々が『異常』と交わってしまうのは、大部分がもう知らぬ間に関わってしまったているのにまだそれに気付いていない人々。

俺はその中に含まれた。

元からそちら側の世界に関わる運命だった。最初から。

一度だけ。

たった一度で自分のいる世界から違う世界へと変貌してしまう。

俺の場合は高校一年生の冬、雪が舞い散る銀世界で起こった。

それは俺を、俺の世界を変えてくれた彼女との出会いでもあった。この出来事さえなければ俺はまだ普通に世界の裏事情なんかには首を突っ込むことにはならなかったのかもしれない。

でも、俺はこちらの道を選んでしまった。

後戻りはできない。

後悔は無い。

この時の判断は間違っていたはずだ。そう信じなければならぬ。

俺の世界はここから変わってゆく。

いや、それは俺が知らないだけで、もしかしたらもつと前から始まっていたのかもしれない。『前』の俺だったらもしかしたら……。

だが『今』の俺にとってはこれが全ての始まり。

この物語は異常な世界へと誘われる転機の物語であると同時に、これからの物語を彩っていく上での最初の色となる。

銀色。

それは一面の雪の世界のように美しい彼女を連想させる色。

対して白色とは無の色。空虚で。夢くて。何の鮮やかさもない。

一見銀色とは似通っているようにも見えるが、一点において違いがある。

それは輝きがあるかないか。

一度は全てのものを失い、リセットされた白色の少年はその輝きに満ちた少女に魅せられる。そして彼女はその美しい銀色で彼の白いキャンバスを彩る。

これは白色の少年と銀色の少女の物語。

## 一章（１） 新代荘

新代荘。  
にいしろまう

形は直方体。屋根はグリーン、外壁はベージュ色の塗装がされたコンクリート壁。というのはこの新代荘が建つてばかりの頃の事である。現在はそれから約二十年が経ってしまい、屋根も壁も色褪せている。住戸は全部で六つ。各住戸には八畳の部屋とトイレ、流し台、風呂が付いている。基本床はフローリングなのだが、中には畳の部屋もある。一階と二階に三部屋ずつ分かれており、それぞれの階の外に廊下がある。二階に上がるには、建物の横に設置された二階の廊下に繋がる階段を使えばよい。

周辺の土地利用は住宅がほとんどではあるが、他に荒地や田、畑、雑木林など。

交通の便があまりよろしくなくて、新築というわけでもないのですが、おすすめの物件とは言えないだろう。

だがここに住もうと思っても、それは不可能である。

ここは貸間としては使われていないのだ。

現在は家主を除いて三人の高校生が住んでいる。

ただし、居候。

彼らは六住戸ある中でそれぞれ一部屋ずつ使用している。

住居人の状況はこうだ。

この新代荘を道路に面している方から見て、一階の右端『〇〇一号室』は家主——新代にいしろ藍あいの部屋である。他住居人は、一階の中央『〇〇二号室』に新代にいしろ若葉わかば、一階の左端『〇〇三』号室に常磐とこわ幸祐こうすけ、二階の右端『〇〇四号室』に白上しらかみ彩人あやこ、となっている。ちなみに階段は右側——『〇〇一号室』と『〇〇四号室』の付近にある。

午後八時。

新代荘の全員が『〇〇一号室』（新代藍の部屋）玄関に集合して

いた。

藍以外の三人とも玄関に立ち止まったままで部屋に上がらず靴をまだ履いている。

玄関はそれほど広くない。三人も居るとなると、とても窮屈だ。しかし、三人はそこから動かなかった。それにはちゃんとした理由がある。

新代荘では各住戸にキッチンはあるが、食事は藍の部屋で取ることが習慣になっている。調理は藍の担当。これはもう何年も続いていることだ。

朝食は毎日七時と決まっており、その時に藍がその日の夕食の間帯を皆に知らせておくという仕組み。またメニューを知らせることもしばしば。

稀に若葉と幸祐（彩人は部活動に参加していないため除く）は高校の部活で帰りが遅くなることがあるので、そういう場合はあらかじめ朝の時点で伝えておく。

今日の朝、晩御飯は鍋をやらうと伝えられていた。

そして予定通り彩人、若葉、幸祐の三人は藍の部屋を訪れた。

今日は鍋。

そう。鍋のはずだった……。

「ごめんね、鍋作れないわ」

この日はあらかじめ晩御飯が鍋であると伝えられていた。鍋は新代荘でちよつとりツチなメニューであり、三人は朝からずっと楽しみに夕食の時間が訪れるのを期待して待っていた。

だがこの一言が彼らの期待をぶち壊しにした。

期待をぶち壊しにした張本人——新代藍。背丈は女性の中でも高い方だろう。すらっとした体型でスタイルも悪くない。光が当たると青黒く見えるさらさらとした黒髪を後ろで紐を使って結んでいる。すっぴん（今日は午前中に鍋の材料の買出しのために化粧をしたが、午後からは化粧を落としている）であるのにも関わらず男性が目を引きくこともある。ぴちぴちの二十代はとうに終えたというの

に、年齢に比べて若々しい。

また新代荘の家主であり、新代荘において子供三人の母親的な役割を担っている。

藍は両手を合わせてお腹を空かしている高校生たちに謝る。

他三名は哑然としていた。

「あのー、もう一回言ってほしいんだけど……？」

呆けたような口調をするのは白上彩人。髪の毛を染めているわけではない。が、生まれつきの茶色っぽい髪の色をしている。どこかしゃきつとしておらず、ふわふわというか、だらけているというかのような、そんな雰囲気を出している。一言で表せば、だらしない。聞き間違えたかと藍に再確認する。

「だーからー、作れないの」

藍はもう一度、現在の状況を端的に告げる。

「ええつと……じゃあ鍋……というか晩御飯はどうなるのよ？」

藍を問い詰めるように言ったのは新代若葉。やや丸顔気味でいてほがらかさがあり、笑顔の可愛いショートヘアの女の子。高校では水泳部に所属している。

「まあ無理ね」

バツサリと若葉の言葉を切り捨てる。

「無理つて……じゃあ今日の晩御飯は何になるの？」

若葉は代わりとなる他のメニューを訊いてみる。

「だからー、無理なの」

藍の言葉が段々とあきれ口調になってきた。

「まさか……。何も作れないってこと?!」

「その通りよ」

藍は期待を裏切られたあげく、空腹の三人を前にしてさらりと告げる。

「そんなぁ……お母さん」

若葉は希望の途切れと空腹でうなだれてしまった。

ここで未だに冷静に状況を見ていたもう一人の住人が中指で眼鏡

を鼻の上に持ち上げて話し出す。

「他の物が作れないというか……カップ麺とか買い置きは？」

冷静な口調で話すのは常磐幸祐。彩人とは正反对で見た目からしてすっかりしていそうで、頭もよさげに見える。見た目だけでなく、彼はその見た目通りの人物だ。高校では陸上部に所属し、勉強の上に運動もできると、彩人とは正反对である。

幸祐はいたって動じていないようで、別の策を探すために尋ねる。  
「おお、その手がある」

彩人は内心で、ここはしっかりしてこういう時に頼りになる幸祐に任せるべきだと判断して、深く会話に割り込まないようにして言葉を繋げるだけだ。

「カップ麺は買い置きして……あるわね……」

そのような藍が希望の光に満ちた言葉を言った途端に、うなだれていた若葉がぱつと顔を上げる。

幸祐と彩人は胸を撫で下ろす。

「でも作れないわよ」

「……は？」

三人は同時にポカンとした顔になった。

（なんでカップ麺が作れないんだ？）

冷静さを保っていた幸祐でさえ驚いているようだった。

「そ、そう！ 材料はあるのよー」

右こぶしを左の手のひらに、ポン、とたたき藍が開き直った調子で言う。

「えっ！ 材料あるの？」

予想外だ、といったように彩人が応答する。

彩人だけでなく他の二人ともてつきり材料を買い忘れていたから鍋は作れないのだろうと思っていたのだが、どうやらそれが原因ではないらしい。

「……え？ ……というか藍さん？」

ここで幸祐が良い点を突く。

「なんで作れないんだ？」

幸祐が根本的な原因について尋ねる。

「それはですねー。ははは」

藍が笑って誤魔化そうとする。

「誤魔化さない」

幸祐はそれを許さない。

藍がむむっ、と眉間にしわを寄せる。

「それはそのー……」

言い出しにくそうにして顔を背けていたが、幸祐に詰め寄られてはどうしようもない。

「とうとう話す時が来てしまったのね……」

藍は真剣な趣を醸し出す。

「今まで隠し続けていた主人公の秘密をとうとう暴露するみたいなの言い方はやめて」

そして藍は彼らに白状。

「お湯を沸かせないのだから当たり前だわね。おわかり？」

三人とも再びポカンとしていた。

幸祐が一度深呼吸をしてから続けた。

「えーと……、なぜ？」

「まあガスが止まっているのよ」

「まさかガス管が？」

「いえ、この冬の影響で凍ったとかではないわ。そうね……言い方が悪かったかしら。ガスがとまっている、ではなくて、ガスが止められた、ね」

「……止められた？」

「ガス代払ってなかったから止められちゃったの。ほらこの紙」

そう言っただけのポケットから取り出した紙を三人の前に提示する。

そこにはガスの差し止めのことがしっかりと書かれていた。

つまり今日一日中ガスを使うことができない、ということの意味

する。

「藍さんのせいかな！」

「ごめんねっ」

ねっ、と藍は可愛らしく言っただけなのだろうが、他三名にとってそれはただの挑発みたいなようなもので彼らの怒りを買っただけだった。

さしもの冷静沈着な幸祐も藍の態度に少し怒りを感じてきているようで、肩がプルプルと震えている。幸祐の頭で、プツンと何かが切れる音がして、ただならぬ気配が体を包み込む。

（あ、切れるかも）

幸祐が怒りを他人に見せることはめったにあることではない。そんな幸祐は藍にはよく怒りを見せる。今までに何度とか藍の挑発的な態度に踊らされてきている。幸祐が藍と言いつつ場合幸祐には勝ち目はないだろう。幸祐は藍をそれだけ苦手としている。

しかし幸祐も軽く挑発に惑わされないように、こみ上げる怒りを無理やり押さえ込んだ。

（おお、押さえ込んだか）

彩人はそんな風に幸祐に感心していた。

幸祐がふうー、と息を吐く。

あきれてしまったようで難しい顔になる。

とうとう黙りこくってしまった。

幸祐はこのまま藍と話を続けるといつかは絶対に取り乱してしまうと思うて一時退却する。

選手後退、常磐幸祐に代わりまして白上彩人。

「で、どうなの？これから。もしかして今日の夕食は断食？！」

彩人は幸祐の様子を見かねて代わりに言う。

このまま食わずじまいで今日を終えられない。

「責任はちゃんと取ってくれよ！。なんとかして」

しかし返事は……。

「まあ彩人も大胆ね。責任なんて。そういうことを言う年ごろなの

かしら」

藍は幸祐と話していた時と全く態度を変えず、反省の色が見えない。

彩人はこの手の挑発には引っかからずただ、この人は相変わらず面倒くさい人だ、と思ったのだが口には出さないようにしている。

「まあ……そう……ね。ふーむ」

藍は目を閉じて考えた。

「あつ……。あつた」

「……おお!」「」

彼らはどうせありはしないと既に試合放棄のように諦めていたのが、答えは彼らの考えとは反していたので歓声をあげる。

藍の返事を聞いて、唸っていた幸祐の肩がピクツと動き、若葉と彩人も目を見開いて藍を凝視した。

「しばし待たれよ」

藍はそう言うて部屋の押入れの前へと向かう。

他三名は靴を脱ぎその後を追う。

辿り着いた先は押入れの前。

各部屋に一つずつある収納スペースだ。

そして襖を開けて押入れの中をガサガサと漁りだし、中の物を取り出していく。

押入れの中から色々な物が次々と湧いて出てくる。

わんさか、わんさか。

まるで温泉を掘り当てた時噴水みたいに出てくるお湯のようだ。

一体押入れにどれだけの物を詰め込んでいるんだ、という意見で

三人は一致しているだろう。

若葉がその一つを取り上げる。

「何これ……美容薬品」

それを見た幸祐も一つを取り上げる。

「こっちはダイエット関連だ」

彼らが手に取った以外にも湧き出てきた物はダイエット器具や美

容食品が多くを占めていた。

新事実だった。藍が三人に秘密にしていたことを暴露。

「藍さん。こんな物必要？」

彩人は美容薬品を持ちながら、押入れの下段に上半身をつっ込み四つん這い状態の藍に尋ねた。

すると藍がニヨキニヨキと後ろに下がってきて、彩人の方を見る。

「どういうことかしら？」

「いや、藍さんって綺麗な方じゃないかと思うし……。」

藍は高校生の彼らの倍はすでにある年齢にして、見た目は二十代と判断してしまいそうな若さである。

「だからこういう物は使う必要がないかなーって……」

「うれしいこと言ってくれるじゃない。でもね、それを保つにはやはり頼らざるを得ないの。わかる？ 最近はまたお肉が付いてきちゃったみたいだしねー」

お腹辺りのお肉を摘んで悲しげな顔をする。

「家でぐうたらしているからじゃ……」

「あ？ なんか言った？ 若葉」

「言ってない！ 言ってない！ ごめんなさい！ 何も言ってません！」

もう何か失礼な発言をしたということを白状していることがまるわかりであった。

「……まあいいわ。で、さっき彩人、うれしいこと言ってくれなかった？ 綺麗だって。でもね、それを 保つにはやはり頼らざるを得ないの。わかる？ 最近はまたお肉が付いてきちゃったみたいだしねー」

「そうですか……」

「いいこと言ったお礼に美顔スマイルを差し上げよう」

そう言って藍は彩人に向かってはにかんでみせる。

(……)

彩人は目を逸らした。決して面と向かったために恥ずかしくなっ

たわけではない。彼は呆れ顔だ。

「そこ。そつぽ向かない」

（何もうれしいことはありやしない。お礼だったらもう、こうちよつといいもの欲しいよな。今欲しい物つて言ったら特に……。）」

「やつぱりお小遣いつてもらえませんかねー」

彩人は手をこねこねしながら駄目もとで頼んでみる。

彼らはお小遣を貰っていない、いや貰えないという表現の方が正しいだろう。新代荘の家計は少しも裕福ではない。現にガスが止められてしまっている。しかしこれは悪魔でも藍のミスが原因である。そのことを考慮しなくとも新代荘では藍が一人で彩人、若葉、幸祐の三人分の食費、はたまた学費までも支払っていることから察しが付く。これらの莫大な費用は全て貯蓄をすり減らしながら賄ってきた。つまり数年前までは莫大な貯蓄があったことになる。現在の藍の仕事はパートタイムのアルバイトだ。それほど給料が高いわけもなく、生活費として消えてゆく。

「彩人？ この世には不可能なことだってあるのよ。そしてこれが当てはまってしまうの。だからいい加減に諦めなさい。叶わぬ幻想は抱くものではないわ」

思っていた通りの返答だった。

「そうそうお小遣いちょうだい」

お小遣いというワードに引かれて若葉が話に乗っかる。

「さっき言ったことを聞いてなかったの？ そんな余裕はないわ」

「じゃあこれらはどういうことよ！」

ビシッ、と若葉が床一面に置かれた藍の私物を指差す。

「それは……」

藍は一瞬戸惑い。

「生活費よ！」

「どこがよ！ どう見たって嗜好品じゃない！」

「うっ……」

藍が押され気味で一步後ずさりする。このようなことは滅多にな

い。

「金が欲しかったら働きなさい」

「高校はバイト禁止なの！」

「つまり学校はバイトをしないで学業または部活動に熱心に勤めよと。どっかの誰かさんは勤めていないけど。すなわちあなた達には必要ないってことね」

「けちっ！」

藍は口笛を吹いている。

それに異議があつた彩人だが。

「でも藍さん、お……うつ！」

「それ以上言わない」

（いやまだ何も言つてないだろ！）

藍は彩人が話し出した途端に手が既に動いていた。

彩人は口ごもる。言葉が詰まっているのは藍の右手が口をわしづかみに押さえているからだ。

「ふんっ。何を言つたつて無駄よ」

（目つきが怖い！）

「わかった？」

藍はさっきの目つきと一変。笑顔だ。ただし、その笑みも恐ろしさがあつた。

彩人は首を縦に振る。

「よろしい」

藍は手を放して彩人を解放する。

（口止めだ……）

彩人はこれ以上の発言は身の危険がありそうなので、黙りこくる。藍は少しも意思を曲げなかった。

高校生には欲しいものだってたくさんあるだろう。学校の友達とどこかへ遊びに行きたいだろう。

しかし、実質、彼らはあまり文句を言える立場ではないのだ。彼らはあくまでも居候だから……。

「で、何か見つかった？」

何を言っても藍には利かないと分かっていた幸祐が話を本題に戻す。

冷静さを取り戻したようだ。

「ああそうだったわね。一応見つかったことには見つかったわ」

藍は再び押入れに潜り、探し物を中から取り出してきた。

「これよ」

藍が両手で抱えだしてきたもの――カセットコンロだった。

そのカセットコンロはけっこう古いもので周りの塗装が剥げており、実際に使ったことがあったかどうかも定かであった。

「こういう物があったとは……。これでキッチンのガスコンロの代用ができるな」

幸祐も一安心といった感じた。

「さあさっそく作ろう」

「ようやく飯かー」

「もうお腹ペコペコー」

そのまま彼らは部屋の中央に置かれた丸机に向かい腰を下ろす。  
が。

「そういうわけにもいかないのよねー」

いい流れだったはずが、藍の言葉がせき止める。

「まだ何か？」

彼らはいい加減呆れていて、聞き返す言葉も適当になってきている。

その原因は藍自身にもあると言える。というか藍の言動にあると言ってもいい。

彼らの空腹は頂点に達しようとしていたため、頭には早く夕食にありつきたいという思考しかなかった。

「またもや同じ壁に阻まれた」

藍は困ったなー、と繭を纏めながら言った。

「まさか……」

最初に理解したのは幸祐だった。彩人と若葉は「何？　どういうこと？」ときよろきよろ幸祐と藍に目を移していた。

「無いのか……」

幸祐の言葉で取り残されていた二人もようやく理解する。

「その通り……」

室内の空気が重くなっていく。

「『ガス』が」

「それはどういう……」

「だからガスボンベが無いってことだよ。ガスボンベが無ければ力セットコンロが使えるわけが無いだろう？」

「そんな……」

「マジかよ……」

若葉はテーブルにうつ伏せになり、彩人は椅子に大きくもたれかかる。

「もういやー、お腹すいたー」

子供が母親に駄々をこねる時のように若葉が手足をジタバタさせる、が、エネルギー不足の為にすぐ力尽きてしまう。

「あなた達！　諦めたくはないわよね？」

「どうせできないじゃない！」

「まあ、どうにかする」

「どうやって？」

「……何とか」

さしもの藍も責任を感じているらしかった。先ほどのふざけた態度を改めて、やや真剣みになっている。

「そうねー何とかなると言えばなんとかかな……かな。それには一

人の尊い犠牲が必要になってしまっけど」

「どういこと？」

「それは――」

■ □ ■ □ ■

彩人は一度自分の部屋に戻り、ニット帽、マフラー、ジャケットのアイテムに、三枚着――一番下はシャツ、中間はスウェット、一番外側には黒のダウンジャケット――という完全装備身になり、右手に傘を持って藍の部屋に再び来ていた。

そして玄関で靴紐を縛りなおしている時に。

「頑張つてね。彩人……」

ハンカチで涙を拭う仕草をし、肩が震えている藍より（涙は流してはいない。そのかわりに笑いを堪えている）。

「いつてらっしやい」

かわいそうに、と若葉より。

「達者でな」

頑張つてこいよ、と幸祐より。

「……」

対する彩人は無言で立ち上がる。

「ああ、これお金ね」

さっきまで涙を拭う振りをしていた藍は手に持っていたものを彩人に差し出す。

そのまま、彩人は藍が手に持っていた物を手渡された。

彩人はドアノブに手を掛ける。

「くそう……なんで俺が……。じゃあ……行つてきます……」

その時の彩人の顔は実に悲しそうだった。

さあ扉の向こうは銀世界だ。

## 一章（２） 『今』の彼にとっての出会い

辺りは静寂に包まれている。

新代荘周辺は一戸建ての家が何軒か立地し、周囲には田んぼや畑もある。よって新代荘近辺ではそれらが何本もの細い道を網目状に作っている。

彩人はその網目を縫うように右へ曲がり、左へ曲がりを繰り返しながら進んでいく。

「はああ」

ため息混じりに白い息が出る。

（何で俺がこんなことを……。くそ……。藍さんめ……）

藍は解決案があると言い切った。

それは次のようなものである。

ガスコンロが押入れから発掘された後、ガスがないと期待を打ち砕くこととなった。

要するにガスボンベを買ってこい、ということだ。

ああついでにこのメモに追加の材料書いてあるからこれも買ってきてね、と藍から伝言もあり、他にも追加でお使いを頼まれていた（あの時勝っていればこんな事にはならなかったんだが……）

誰がこのお使いをするかを決めるのは、やはり最も公平である『はず』のじゃんけんであった。

結果はパーの人が一人、他三名がチョキ。すなわちパーの一人負けである。しかもこのじゃんけんは一度もあいこにならずに、一回で決着が着いた。

（一人負けってなんだよ）

彩人は不満が大ありだった。

（昨日だってゴミ出しのじゃんけんで一人負けしたし、その前だって……。もしかして、俺が何を出すのかを読まれているとでもいうのか……。一人負けの確率ってどれだけだっけ……。ああもう考え

ても無駄だ！ 数学は苦手なんだよ。まあとりあえずかなり低いのはわかる。それなのに連敗なんて読まれているとするしか言い訳がつかないじゃないか……）」

彩人は基本、面倒くさがり屋だ。お使いなど「めんどくせー」の一言で打ち返すはずなのだが、藍には簡単には逆らわない。いや、逆らえない。

（今回の場合はふざけている。なんなんだこれは。普通のお使いだったらこんなにも今、俺は苦しんでいないはずだ）

こんな悪条件が無ければの話だが。

「寒い……」

小声で呟いた。

体はガクガクと震えている。

ザク……ザク……。

聞こえるのはその音しかない。それほど静かだ。

「どんだけ降ってんだよ……」

雪は傘にどんどん降り積もって重量を増していく。そして傘が重くなってくるたびに傾けて雪を落とす。

「今年は異常じゃねえか？」

彩人は今この状況に至ったことに対する蟠りわたかまを、それを晴らす対象が見当たらないがために、つい何かに原因を押し付けようとしてしまう。

だが確かに彩人の言うことにも一理あると言ってもいいだろう。

悪条件の一つ。

二月十二日。

寒気さむけきわまる如月。

まさに冬。

つい三日前から分厚い雪雲が色見いろみ全体の空を覆っていて、天に青空を拝めることは出来ず、ただそこには灰色の空があるだけだった。色見とは、新代荘のある帆布地区はんぷに他の七つの地区も含め、全八区から構成される地域のことを指す。色見では例年雪は多少降るが、

今年の冬、特にこの時期は稀に見る大雪になると一月頃からテレビの天気予報でよく言っていた。

その予報は的中し、色見は銀世界と化している。

今日も雪は止む事なく朝からずっと降っており、どんどん積雪して町を白く満遍なく塗りつぶしていく。

しかも夕方から風が強くなっており、昼間で穏やかに降っていた雪は気分を悪くしたかのように表情を変えてしまつて吹雪になってしまっている。

彩人が目指す目的地はちょうど風上にあたり、強い冷気を纏った風は正面から襲う。

それを傘で防ぐように歩き続けているが、傘は上半身全体を守れるか守れないかの瀬戸際で、足には容赦なく吹雪が襲う。  
凜とした冬の空気が彩人を苦しめる。

彩人は傘をやや前に傾けて吹雪を防ぎながら歩く。

ザク……ザク……。

降り積もったまだやわらかい雪が音を立てる。一步一步進むたびに足が埋まるため歩きづらい。  
息を吐くたびに白い息が出る。

「寒い……」

彩人はこの銀世界に放り出されたのだった。

これが藍の言っていた『尊い犠牲』というものだった。

そしてもう一つの悪条件。

時間帯である。

ただいまの時刻は午後八時すぎ。

ただでさえ冬で日照時間が少ない上に、この時間帯ではいつそう気温が下がり、気温は氷点下に達していそうだ。

また、新代荘の最も近くにある（徒歩十分）スーパーマーケット『イトヤスシ』は、とっくに閉店時間を迎えてしまっている。だから、彼の行き先はコンビニ（徒歩二十五分）へ変えざるを得なかった。

往復五十分。

それがこの極寒の中にいなければいけない時間である。

そこに新代荘の立地条件の悪さがにじみ出ていると言えよう。

（ショートカットすれば十五分で着けるか）

新代荘の周辺は細い路地が網目のようになっている。その中でも電灯がある所無い所とあって、この時間だと電灯がない道は光がないに等しい。ただ中には民家から漏れるわずかな光が照らしている所や、機械だがどこか寂しいようにも見える自動販売機が闇の中にポツンと立っている所もあるが。

それを考えても普通は電灯のある道を行くのだが、その道を選ぶとどうしても遠回りになってしまう。往復一時間以上はその場合を考えた時の所要時間だ。電灯のない道を行けば四十分までに短縮できる。

だが彩人はさらなるルートを知っている。

実際、新代荘からコンビニまで直線距離で考えるとそれほど遠くはないのだ。コンビニと新代荘の間には荒地や田、畑、とくに雑木林などが障害物となっている。そのためそういったものを避けるために迂回して行ったときの所要時間が、先ほどの往復五十分ということになる。

しかし、必ずしも迂回する必要はない。道がないというわけではないからだ。ただし、その道は暗かったり、土手道だったり、しっかりとした整備が行き届いていない道だったりする。

それらをつまいこと利用すると大幅な時間短縮ができる。先に挙げたデメリットももちろんある。

それらの道を入々は好んで通ろうとは思わないだろう。まして知っている人もわずかしきないかも知れない。だから整備が疎かになる。

知る者は少ししかいないという道を、彩人は知っていた。

なぜ知っているのかと言うと、『彩人は暇人だから』という解答が最もしっくりくる。

彩人はよくフラリとあてもなく出かけることがしょっちゅうある（それを散歩として彩人は趣味と主張する）のだ。

高校生だったらゲームセンターとかに行けばいいじゃないかと思うかもしれないが、彼はお小遣いを貰っていないのでただふらふらするしかない。行けるとしたら本屋で、立ち読みをするしかない。

それが習慣になって暇だから色々な場所へと赴くうちに新代荘周辺の土地は大方記憶してしまっている。

そのように空虚に消費されていく時間の源は彩人が高校の部活動に参加していないなどから出てくる。

彩人は単に言えば面倒くさがりや。

何かを積極的にやることもほとんどない。

ダラダラ、ゴロゴロと日々を過ごす。

それは充実した生活とは言えないと思うだろう。

だが彩人はそれでいいと思っている。

平和で楽に暮らしていれば何も困ることはない。

だから彩人はそんな風に生きる人なのだ。

「こっちか」

彩人は車一台の横幅より少し大きい道路から、ぼろぼろの廃屋や小屋の間の暗い細い道へ入っていく。その細道は車が通れるほどの道幅はない。この道をまっすぐ行くと雑木林にぶち当たる。

「懐中電灯つと」

ジャケットのポケットから懐中電灯を取り出す。

これがないと今から行こうとしている道は歩けない。なにせこれから明かり一つない真っ暗な道を通るのだから。

この辺りに民家は立っていない。

右手には傘、左手には懐中電灯。

どんどん進んでいくとやがて雑木林にぶつかる。

雑木林は人が通れるように道が一本あり、今歩いてきた方向とコンビニのある通りの方を繋いでいる。一応コンクリート舗装がしてあってガタガタ道ではないので足を踏み崩すこともない。

この道への入り口はどこへ繋がっているかを予測できないため、人は通ろうとしない。彩人以外にこの道を知っていて利用する人はいないかもしれない。

「不気味だな」

ここはさっきの住宅地の静けさとは違って、風に揺られた木々が互いに擦れ合う音、それにしたがって葉に降り積もった雪が落ちる音がある。

その音が恐怖を煽る。

住宅地を歩いていたら時よりも少し歩く速度が上がっていた。雪が歩くのを妨げているにもかかわらず。

五分足らずで雑木林を抜け出した。

雑木林の出口も入り口と同じように民家はない、だがもう少し進むと民家は建ち並んでいる。

民家が建っているがこの道にまだ電灯はない。

だから彩人はまだ懐中電灯で行く先を照らし続ける。

懐中電灯の明かりともう一つ、この道には自動販売機の明かりがある。

この時間帯車道は電灯の付いた電柱が等間隔に連なっている。しかし路地裏は電灯がなく自動販売機のライトだけが照らしていた。

「何かこう……人がいないところにある自動販売機って……」

まるで孤独を感じているかのよう――

などという機械に自分と同じ何かを感じてしまった彩人はその自動販売機に横を通り過ぎる。

彩人にも暗く細い道は孤独感を感じさせる。

細道の遠くの先は明るくなっている。それはこの道をまっすぐ行くと車道に出るからだ。

（そういえばガスボンベってコンビニで見かけたことあったか？

売ってなかったら……とんだ無駄足になるな。まあ……あるだろう。そうじゃないと俺は恵まれない！）

そんなことを考えているとようやく、ちゃんと白線の引いてある

二車線道路に出た。

この時間でも車は数台走っている。さすがに車道であるので、街灯から放たれるオレンジ色の光が道路全体を照らしている。

（よっしゃあ！ さあ目的地は目の前だ！）

彩人はやる気を高める、が……。

「はあつくしよっんっ！」

鼻を嚙った。



コンビニの店員の「ありがとうございましたー」という挨拶を聞いて店内を出る。

店から出た瞬間、着込んでいるのに服の隙間を縫うように冷気が入り込んできた。

「うつ……」

体が急に固まる。

「はああ」

ため息は空気中で白い息となりしだいに消える。

「萎える」

店内の空間がどれほど冷気からの回避エリアとなっていたかと思わせられる。

彩人は行きに味わった凍てつく町をまた歩かなければならない。

そう思うと帰る気力が削がれる。

コンビニでつい長居したくなって店内を無駄にグルグルと回っていた。店内の暖房は格別の癒しだった。だから先ほどまでの苦闘を忘れかけていたのかもしれない。しかも暖かい所から急に寒い所に出たので冷気がいつそう冷たく感じていた。

あまりの寒さに体を動かす気が湧かなかったが、店の前でいつまでもぐずぐずしているより歩いたほうが体を温められると思い歩き始める。

（この仕事の報酬ぐらいあってもいいよな）

彩人は上着のポケットからコンビ二で買った缶入りのコーンスープを取り出す。藍はご褒美の分までお金を渡したわけではないが、頼まれたものを買ってもお金が余るとわかった彼は勝手に商品を追加した。もちろんこれは新代荘の皆には秘密である。

すぐに呑んで缶を空にしてしまうのはもったいないので、手を温めるために吞まずにとっておく。

（新代荘に着くまでに吞んじゃえばれないし）

幸いなことで、行きよりかは雪の降りが弱まり、風も止んでいた。傘を差さなくてもある程度大丈夫そうである。

だから彩人は差しているよりかは畳んでしまった方が楽なので傘を閉じる。

また行きと同じ細道へと入っていく。

もちろん帰りも同じ裏道を使って時間を短縮する。

「それにしてもよかったな！。注文の品は全品購入完了。売ってないというオチがなくてよかったあ」

彩人は右手に買った物が入っている袋を持ちながら歩み進む。

「帰ったら飯の前に風呂入ろうかな」

彩人はかなり着込んだつもりだったが、さすがに長時間この寒さの中にいたので、体は完全に冷え切っていた。

ちなみにこの時の彩人は気付いていないことだが、ガスが止められているので風呂には入れない、というのはこれから数時間後の出来事である。

暗い道にぼつんと立っている自動販売機が見えてきた。

相変わらずのしんとした中に立っている。

（さぞかし寒いことだよな。お前にしかわからないよな……。あいっらにはわからんだろうな俺の辛さは！）

彩人は自動販売機に語りかけていた。

「なにやってんだ……。俺……」

急にむなしさが沸き立ってきた。

家を出る前はもう八時を回っていたので人の影はない——と彼は思っていたのだが。

ザク……。ザク……。

「ん？」

自分の足音。彩人はそれとは別に、前方から雪を踏む音が聞こえたような気がした。

彩人は一度立ち止まって耳を済ませてみる。

ザク……。

かなり小さい音がする。

やはり彩人の前方に誰かが歩いているようだ。

ザク……。

道は街灯が無いので自動販売機が立っている所以外は真っ暗であり、誰かが歩いている様子は視覚ではわからない。

（へえー。俺と同じようにこの極寒の中を出歩いている人がいるんだな。あの三人はどうせ俺の苦労なんてわからないだろうが、あの人なら分かち合えそうな気がするな）

彩人はその人と同じ境遇にいたので共感できると考えていた。

今度は機械ではなくちゃんと人だ。

（しかもこんな時間に。多分もうすぐ九時になるんじゃないか？

足音からすると一人みたいだな。暗い夜道は危な——）

そんな時、ある事が頭を過ぎった。

（あつそういえば……）

彩人は学校の事を思い出していた。

この前学校で『不審者が出没しているので注意してください。できるだけ一人で下校しないで二人以上で帰りましょう』という連絡を聞いていた。

（まさかね……。ないない）

そんなことはないと考えを変えようとするが、取り除くことのできない不安がそれを妨げる。

（懐中電灯で照らしてみるか……。いや下手に怪しまれると嫌だな……

…)

しばらく立ち止まって耳を澄ましていたが、足音は鳴り続く。どうやらこちらに向かつて歩いていっているようだ。

それがわかると不安がさらに募った。

(でも狙われるのって、あれだろ、女子高生とかだよな。そうとうせ痴漢目的のとかだろ。大丈夫だな、ああ大丈夫なはずだ。ちょっと考えすぎだな)

彩人は歩き始めた。

(別に気にすることもない。普通にやり過ごせばいいんだ。いかな凝り固まった考えは)

ザク……ザク……。

ザク……。

二つの足音は近づいていく。

相手のほうはだいぶ歩くテンポが遅いようだ  
雪を踏む音が次の一歩までの間がかなり長い。

ザク……。

ザク……ザク……。

自動販売機が近づいてきた。反対方向から歩いてくる人もすぐ近くまで来ているようだ。

彩人はとうとう自動販売機の前を通る。

相手を通ると同時に同時だった。

二人は自動販売機の前ですれ違う。

彩人は横目で自分の右側を通った人を見る。

(そう何の問題も――)

「な――」

彩人は目を見開いて、声を失ってしまった。

彼は自分の目を疑う。

神秘的なものが目に映った、そう脳の中で処理される。  
銀色。

そうそれは雪に劣らないくらいの輝きを放つ。

彩人は目を離すことが出来なかった。

見とれた。この世の美しいものを見たときのように。

だからそれが傾いて倒れ始めているというのに、最初は銀色に輝いたものがなんであるかが理解できなかった。

だが彩人の体は本能的にもう動いていた。助けないと、と体が判断したようだった。

彼はもうすでにすれ違っていたため体を一八〇度回転させる。

その時にはその人は重力にだけ引き寄せられるように地面へと。

（くっ……間に合わない！）

そう判断して、受け止めるためには雪の積もった地を蹴って地面と水平に飛ぶしかなかった。

右腕を目一杯伸ばしてそれを掴んだ。

そのまま空中でその人の正面に入り込み抱きかかえる。

空中キャッチ。

彩人はその下敷きとなって一緒に地へ倒れる。

バサッ、と雪に埋もれ、積もった雪はその衝撃で舞い上がる。

「ふう………」

地は雪で覆われてクッションみたいに柔らかく、白銀色のそれと彩人を雪が同時に包み込む。  
痛みはない。

彩人は体を起こすのと一緒にキャッチしたのも両腕で抱えて起こす。

「――！」

その後だった。彩人が本当に驚いたのは。

銀に輝いたもの、それは――少女。

その少女は、まるで雪に溶け込むことができそうだった。

先ほどの通りすがりに横目でみたもの。

銀。

彩人は改めて見てもまたそう思った。

美しい白<sup>はくせき</sup>皙。彼女の長い銀髪は自動販売機のライトを反射して輝

いている。見たところ彩人より少し年齢は若く、背丈は小さい。色白な四肢。その体はほっそりと、またとても軽かった。

「――！」

だが見とれていたのは一時的だった。

他の重要な事がそれを遮ったからだ。

「おい！ 大丈夫か！」

彩人は彼女に叫んだ。

それは何故か。

銀の少女は衰弱しきっていたからだ。

少女は呼吸しているようだが、手足はピクリとも動かない。

彩人が手袋を外して、少女の頬に触れる。

「冷たい……」

彩人の手はこの寒さで冷え切っていたが、それでも彼女の肌の方が冷たい。

生きてはいるが、彼女からは暖かさ――人の温もりがほとんど感じられない。

そのような事など少女の姿を見れば一目でわかる。

彼女の服装はどう考えてもおかしかった。彼女の着ている服――

服というよりは、汚れてボロボロとなった布切れのようなものが一枚、少女を纏っているだけだった。生地は薄く、寒さを防ぐことなどではしない。

ましてこの寒さだ。体は直に冷えるに決まっている。

「こいつ、どういう頭してやがるんだ！」

彩人にはこんな格好で外に出るなど信じられなかった。

彼は新代荘を出る前に各種防寒アイテムに三枚着という完全装備でこの白銀の世界に赴いているのだから。

「そうだコーンスープ」

コーンスープで少しでも温められればと彼女の頬にあて、それから手に握らせる。さらに着ていた中で一番暖かいダウンジャケットを少女に着せ、その自身の身につけていたマフラーも手袋もつけ、

とにかく体を温めさせてあげられればなんでもよかった。

（この子……なんでこんなところに……）

彩人は少女の頭や肩に降り積もった雪を払ってあげる。

彼が歩いていたのは人影のない裏道だ。

辺りは民家が無いわけではないが、少女がこのような時間、このような場所で、しかも一人で出歩いているなど考えられない。

「これじゃあ、まさに不審者の標的じゃないか」

いくつかの不可解な点。

一つ目はこのようなまるで自分から寒さに殺されてしまいそうな格好。

二つ目は少女がこんな時間に出歩いていること。

三つ目はこの少女自体――

「何者なんだ……」

銀色の少女。

「外国人なのか……？　こんな人、今まで見たことがない……。この町の人じゃないのか……」

少女はいまだ目を覚まそうとしない。

「とりあえずどうにかしないと。このままだと絶対に危ない」

その少女を放っておく事などできない。

彩人はそう思って、少女を背中に乗せ、少女を抱えるために後ろにまわした手でビニール袋を掴む。傘は少女を抱える両腕に乗せた。

「ひかたはいからはあ」

彩人は懐中電灯を口に銜える。

「はいひゅうへんほうははたへはふはった」

懐中電灯が小型で助かった、と言ったのである。

彩人はやるべきことをする。

「はあ。へんひょふりよふらー」

絶対に助けるからな、そう心に決めて彩人は全速力で走り出した。

一章(3) 暖房の効いた部屋で

カチッ……。

カチッ……。

カチッ……。

カチッ……。

ゴーン！

「遅い！」

九時を知らせる。

机に顎をついた若葉<sup>わかば</sup>が氣力を無くしながらも声を張り上げる。

藍<sup>あい</sup>、幸祐<sup>こうすけ</sup>、若葉の三人は丸机を囲って座っていた。

「まあ仕方ないんじゃない？ この時間だとあそこのスーパーは閉まっているだろうし」

あのスーパーとは新代荘から最も近くにあり、藍が常連さんとなっているスーパーマーケット『イトヤスシ』の事である。

「あのスーパーの名前って変だよな」

と、幸祐が藍だけに語りかける。

「あれって、ほら、古語でしょ？ 訳すと『とても安い』だよな。

まあ古語は変って言えば変だけど」

「そうねー」

藍も幸祐だけに向けて返事を返す。

「あえて、ああしたってことも……」

「かもねー」

藍は爪切りに集中しているためそっけない返事しかない。

「ねえ？」

と、若葉。まだ机に顎をついている。

「ん？ どうした？」

幸祐が疑問で返す。

「何かさっきからさりげなくスルーされてる気がするんだけど……」

「……」  
「ああ。ちなみに『いとやすし』は訳すと『たいそう簡単』『たいそう安らか』とかいう意味だぞ。値段が『安い』とかの意味はない。その辺に面白みがあると言ったのだが……。」

幸祐はそれ以上言うのは止めた。だからあえて藍だけに話していた。

「へえー……。ま、まああたしも知っていたのよ。ちょっとボケただけ」

「若葉。あんたちゃんと勉強してる？ 来週は学年末テストでしょ？ ああ幸祐、ゴミ箱取ってー」

藍が爪を切り終えた。

「藍さん……ゴミ箱そっち側にあるから藍さんの方が近い」

「だって、お腹がすいて力が出ない」

「全部藍さんのせいだけだね」

「ああ、ちなみにあそこのスーパーは『いとやすし』さんが経営してる」

「そうなん……って、さっきから話をごちゃごちゃにし——

——」

「で、どうなの？ 若葉？」

藍は幸祐の言葉から逃れるように再び若葉に話を振る。

「え？（チツ。うまく逃れたと思ったのに！）」

「前回の後期中間テストだけ？ テストの点数がひどかったわ、全く。せめて一桁はやめなさい」

「なぜそれを？！」

若葉の顎がとうとう机から離れた。

「あなたの部屋にある机の上から右から二つ目の本棚の美術の教科書の間の——」

「もういい……わかった……」

「あらそう？」

彩人、幸祐、若葉はそれぞれ自分の部屋の鍵を持っているが、新

代荘では藍がマスターキーを持っている。

「やっぱりプライバシーの問題とかがあると思うからさ。マスターキーの使用はやめようよ。ね？ そうしない？」

「それはできないわよ。洗濯物取りに行かないといけないし」

新代荘の唯一の洗濯機は藍の部屋にある。高校生三人が学校へ行っている間に藍がそれぞれの部屋から洗濯物を回収してきて、まとめて洗うのである。

「むう……………」

「洗濯しなくてもいいなら別にいいけど」

「わかった……………。そうそう鍵といえばさ。キーホルダーなん——

——

「で、勉強してるの？」

「くっ（またもかつ！）」

「話を逸らしたところでどうにもならないわよ……………」

「部活頑張ってるよ」

若葉は水泳部に所属している。今は冬なので、部活動はほとんどランニングや筋トレなどの基礎体力作りが秋からずっと続いている。「そんなことわかってるわよ。今はこの場にいな<sup>てい</sup>体たらく坊やとは違うから。勉強も大事にしなさいってこと。来年はあんた達も三年生になるんだから。大学行くなってことなら無理してでもお金をだすわ。それくらいのことはしてあげる」

藍は一旦話を止め少し考える。

「いや、するわ…………… たぶん」

「た、『たぶん』が付くのね……………。わかった。勉強、少しは頑張ります……………」

「一生懸命がんばりなさい」

若葉は答えを返さない。

藍がギロリと目を若葉に向ける。

「わかりました……………」

「わかればよろしい」

「……幸祐には何も言わないの？」

さつきから会話に入っていない幸祐はというと畳の上に寝転がっていた。

「呼んだ？」

幸祐がむくつと上半身を起こす。

「幸祐に言う必要があると思う？」

「……」

若葉は口を紡いでしまった。

「えーと何の話？」

幸祐は状況が掴めていない。

「あなたは心配無用ということよ」

「まあいいか。彩人は？」

「まだよ」

「そうか……」

「もう空腹の峠を越えちゃうー」

若葉がパタンと倒れる。

「そういえば勉強って言葉で思い出したけど……」

「あれ幸祐聞いてたの？」

若葉がさつきまでの幸祐に代わり寝転がって言う。

「いやそうじゃないけど。寝てはいないけど、ただ寝転がってぼんやりとはしてた。それで勉強って言葉が何回も聞こえたから」

「ふーん」

と、若葉。

「それより幸祐。何か言いかけようとしていたんじゃないの？」

「そうだった。学校で先生が言っていたんだけど、最近、不審者が出るって」

「ああ言ってた言ってた」

「若葉、気をつけなさいよ。女の子は特に危険だから」

「その事なんだけどそういう不審者じゃないらしい」

「どういう事？」

「ええと……なんか、俺もどこで聞いたかは忘れたけど……放火魔  
って言っていたような？」

「なんで疑問……こつちが訊いてるんだよー」

「いや確信無いからさ……あ、ああっ！」

幸祐が突然に大声を上げる。藍と若葉は手で耳を押さえる。

「急に一体なんなの？」

「炎で思い出した！　なんでこんな単純なことを忘れてたんだ……。  
鍋を食べる以外の選択肢があつたはずなのに。藍さん？　炊飯器。  
使えるよ、ね？」

「……過去のことよ」

「その開き直りは止めたら？　無駄だと思うよ、お母さん」

ここで三人は心の中で同じことを思っていた。しかし誰もそのこ  
とを口には出さなかった。あまりにもこの場にいない少年を不憫に  
思ったために。

## 一章（４） この世界の異常との遭遇

「はあ……はあ………」

白い息が出ては消える。

新代荘での他三名の会話を聞くことができなかった彩人は、この極寒の中でのお使いに伴う苦勞が必要なかったことなど知る由もない。そんな彼は雑木林に入っていた。

（さすがに女の子を背負って走るのは疲れる……俺も幸祐や若葉みたいに部活動に一生懸命勤しんでいればそんなにつかれないのかなあ）

初めの勢いは何処へ。今は走りから早歩きに変わっていた。

彩人は中学時代から帰宅部の道を貫き通しているので、運動をあまりせず、体力も筋力も幸祐には遠く及ばないし、女子である若葉にまでも負けることだろう。

（バイトできたらいいんだがな……）

彩人たちが通っている帆布高校——新代荘から徒歩で通える距離（所要時間三十分）にあり、公立高校なので、経費がいろいろと浮くということに通うことになった——は原則、学生のアルバイト行為を禁止している。だが彩人は一年生の時に一度秘密裏にアルバイトをしていたことがある。その時には学校側には知られることなく続けていたのだが、藍の目からは逃れることはできなかった。彩人は藍からこつ酷くお説教を受けてしまった。それからは彩人だけでなく、若葉と幸祐もそのようなことは口に出さないようにしている。

（いくら貧乏だからってな……でも新代荘の、いや俺たちの現状を踏まえたと言えないのは理解している。理解しているつもりだ……。なのに……なのにだ！あの化粧品やは何だ！ずるい………というかひどい！俺たちには大した娯楽は与えられないのに！帰ったらまたとことん愚痴を言っちゃる）

それにこのお使いの報酬もない。ただ苦しむだけの罰ゲームみたいなものだ。

走るペースがやや落ちてきているが、雑木林の中間辺りまでやって来た。

（まだ半分ぐらいか……。もっとささつと行けるかと思ったのに……）

後ろの少女はまだ起きる様子はない。

（本当に大丈夫なんだろうか？）

と、その時。

「ん……」

耳のすぐ近くで声がした。

そんな近距離で声を出すことができるのは彩人に背負われている少女だけだ。

「起きたのか！」

彩人は目に留まった横に倒れた丸太に少女を座らせてあげる。そして大丈夫か、と声をかけコーンスープの缶を開けてそつと彼女の前に差し出す。

「飲みなよ。暖まるから」

少女はおぼろげな目をしながら缶に両手をのばしてゆっくり掴み、口にそつと運ぶ。すすつと音を立て、少しだけ飲む。

「もういいのか？」

一度缶に口を付けて話したきり動きが止まってしまった。眠いのだろうか。視線は下を向いたままではうつつとしている。

彩人が彼女の目の前で手を振ると、ようやく顔を上げた。

「だれ？」

少女は口を開いた。

「俺？ 俺の名前は彩人だ。フルネームだと『白上彩人』って言うんだけど」

「あ……、や、と」

「ああ、そうだが」

「あ、や……と」

少女はぼうつとしたまま『あやと』という言葉は何度も復唱し続け、だんだんとはっきりとした発音になってくる。

（一体、俺の名前を何回呼ぶのだろうか……）

彼女がその名をはっきりと言えるまで、彩人は彼女を見つめ続ける。

「あやと」

彼女はようやくちゃんと言い終えることができた。そして自分の呟き続けている言葉に突然はつとしたように顔をあげた。

「本当に……あやと……なの？」

彩人が聞いていた呟きはいつしか確認に変わっていた。

（どういうことだ？ これじゃまるでこの子は俺を知っているような）

「ああ、確かに俺は彩人だが……もしかして前にも会ったこと――

」

彼の言葉は途中で遮られた。それは不意に彼の視界の端に今まで無かったものが映ったからであった。彩人の右方数メートル先、ゆらつとした不気味な光が――

ふいに彩人の視線はそちらへ。

その方向を見た途端、目が大きく見開かれる。

光が眼前に迫っていた。そして迫りきった末に衝撃を生む。

「ぐあっ！」

気付いた時には体は吹き飛ばされ、雪の上に突っ伏していた。空気は氷点下にまで冷やされているというのに彩人は背中に熱を感じた。

（なんだ……。なにが……。どうなったんだ……）

思考を張り巡らそうとしても突然のことに頭が追いつかない。

（くそ……寒さのせいで頭がおかしくでもなったのか？ そうだ。さっきの、あの子はどこへ行った？）

雪が積もり氷上のように冷たい地面を這いつくばったまま顔を上

げる。

暗闇の中の転がっている懐中電灯が少女を照らしていた。彼女は彩人の前方にうずくまる様にして雪の覆った地面の上に寝そべっている。

（なんだったんださっきのは……とにかくあの子を起こしに行かないと）

起き上がって慌てて駆け寄ろうとする。

だが、それを妨げる一声。

「ちよっと待ってもらおうか」

（え？）

彩人は足を止めた。

（誰だ……？）

背後からずぶとい男の声。

彩人はその声に反応して瞬時に後ろを振り向いた。そうして彼はようやく気が付く。

「なんだよ、これ……」

彼の振り返った側は明るくなっていた。

ここは民家も近くにない雑木林の真ん中だ。もちろん電灯も立っていない。だから彩人は懐中電灯を使っていた。だがそれとは別に明かりがある。その光は懐中電灯よりも広範囲を照らしていた。橙色の光がゆらゆらと。

炎がその場を照らしていた。

その明るくなった方向から雪を踏みつける音がする。誰かが彩人たちに向かつて近づいてきていることは明らかだった。

だがまだ男の姿は見えない。

懐中電灯は少し離れたところに転がっているため、自分の手元にはなく相手を照らすこともできない。

「だ、誰だ……」

彩人は恐る恐る闇の中に尋ねる。しかし答えは返ってこない。  
「誰だって聞いているんだ！」

彼の声は震えを押さえようともしやえられなかった。

二回目の質問でようやく答えが返ってくる。

「ふん。そうか。見えていないなら好都合。一般人に危害を加えるつもりはない。言う事を聞けばな」

足音が止まった。炎が彩人の前に確かにいる何者かの姿が浮かびあがる。しかし照らされているのは腰あたりまでで、顔はまだ闇の中で確認できない。

炎。

（そうだ。不審者ってそういえば放火魔とか何とか。まさかこいつが学校で言っていた……。本当に現れるなんて……）

彩人は放火魔もことを思い出したが、男の目的は放火ではなかった。彼の目的は他にある。

「それを置いてここから立ち去れ」

（それ？）

男は『それ』と言った。だが彩人には男の言った『それ』が何を指しているのかわからなかった。

彩人が理解できないという様子を見かねた男がもう一言添える。

「おまえの向こう側に転がっている『それ』だ、『それ』」

後ろを振り返ってもそこにあるのは、彩人の所持品かお使いで買ってきた商品が散乱しているだけ。元々雑木林に何があるわけでもなく、それら以外に男の指す『それ』など見当たらない。

（まさか……）

だがそれら以外にある。いや、いる。

そこには少女が一人。

（まさか……この子のことだっていうのか？）

だがそれ以外に考えられない。

（なんだ？ 少女誘拐？ 放火魔？）

「それ……、それ？」

彩人はさつき男の言った言葉をもう一度思い出していた。

（あの娘のことを『それ』と呼んだ……？ それに『転がっている』だって？）

声の主はまるでこの少女を人ではなく物のように扱っているようだった。この男の目的は彩人にはさっぱりわからなくとも、絶対に渡してはいけないということだけはわかる。

（ひどい……。とにかく何だか危険だ。どうにかして早くこの子を連れて逃げよう……。一気に連れて逃げれば何とかなるか）

彩人はゆっくりと気付かれないように足を反対方向に回したのだが……。

「おい！」

男の声が背後から呼び止めることによって、彩人の動きを静止させる。

「聞こえなかったか？ 小僧。もう一度言っ」

（あつちからは俺の姿が見えているのか……）

彩人は凍ったように動けない。

「その少女を置いて行け」

先ほどよりも強く、相手を従わせるように、彩人に命令した。

（置いていく。この子を……）

彩人は少女に目を移す。

そして手がガタガタと震えていることに気がつく。

（なに？ 俺は一体どういう状況に巻き込まれているんだ？）

頭の中で警告音が鳴り響く。どうしたらよいかわからず次の行動へと移れない。

「遅い、さっさとどけ。でないと消すぞ」

彩人の行動が遅いことに苛立ちを覚えた男はさらに脅しを掛ける。  
（消す……だって？ 殺す……ってことか？ あいつは凶器でも持っているのか？）

もし凶器、たとえばナイフを振りかざされたとして彩人は身を守るものはない。

（傘……）

彩人の足元には傘が一本落ちていた。行きは差していたが、帰りは少女を抱えるため使っていなかった物だ。

（こんなので抵抗できるのか？）

「そうだな。仕方ない、とりあえず見せておこうか」

男の言葉とともに直後、暗闇の中に突如新たな明かりが浮かぶ。それは橙色にゆらゆらと。

（あれは俺が吹き飛ばされた時に見た……）

男の顔が浮かび上がった。けれどその男はサングラスをしていて顔を隠している。まるで正体を明かさないようにするために。

しかし問題はそこではない。

彩人の目はいつぱいに見開かれていた。

（あいつ……どうやって火をつけやがった……。いやそうじゃない。どうなってるやがる……あれは―――！）

彩人の視線はその男の左手に向いていた。

その左手は異様だった。異常、だった。

「化け……物……」

彩人は気付いていなかったが、それを見た率直な感想が口からこぼれていた。

「ああ……」

男の方も自身の左手に目を向ける。

「ははは。そうだな」

男は自分の手に火が灯っているというのに何の変哲もないような目で見ている。

「お前達から見れば化け物かもな。どうだ？ おもしろいだろ？」

彩人は言葉を返すことができない。

（何なんだ……あれは？ 絶対におかしいだろ！）

「ビビッちまったか？ それはすまなかったな。さっきのはコイツをおまえの足元に放ったんだ。雪が融けるのは……まあ当たり前か。次はおまえの本体を狙う。だからただでは済まないぞ。もしかした

ら灰なら残るかもしれないな。一般人に知られたからには抹殺する。口封じってやつだな」

ははは、と含み笑いをしながら一方的に語りかける。その時でも男の左手は異様さを保ったままだ。

男の左手——彩人が化け物と称したその左手から火が上がっていた。闇の中で不気味に煌く。いびつな光景。にわかには信じがたい火が上がっている、もしくは燃えているといった表現のほうがぴったり合うかもしれない。だが手が焼けているわけではない。男は火の暑さもどちらにしてもこの事態が異常なことには変わりはない。  
(逃げなくちゃ……そうだ早く逃げないと……。俺は何をこんなところで立ちすくんでいるんだ！)

とにかく逃げることに、それが最優先事項。

(早く逃げないと殺される！)

彩人は慌てて帰る方向——皆の待つ新代荘——へ走り出そうとするのが、すぐに止まってしまう。  
踏み出した右足だけが前に出ている。

(！)

彩人の前には少女が横たわっている。

(くそ……)

彩人はこの状況をとても恐れていた。夢ではないかとも思っている。早く逃げなければ確実にただでは済まない。声の主は少女を置いていけば危害は加えないと言った。少女をまたいででも逃げる事に専念すれば命は助かる。

(死にたくない……)

帰ったら待つてくれている人がいる。彼らはお腹を空かせて待っている。彼らは今自分がこんな状況に置かれているなんて微塵も考えちゃいないだろう。自分は平和な日常が、ただ何事もなく過ごせばそれだけでよかった。だからこんな状況は不幸以外の何物でもない。明日は月曜日だ。明日から新しい一週間が始まる。普通に学校にだって行く。だから自分が死ぬなんて考えられない。ただ日々

を送っていた自分が。

彩人の頭の中でそのようなことがぐるぐると回る。

死にたくない、それは紛れもなく本心だ。

色々な事がぐるぐると。

（それでも）

これから出す決断は彩人にとってよいものになるかどうかかわからない。

それでも。

（置いていけるわけがないじゃないか……）

この状況で女の子を一人置いて逃げるなどということは、彩人にはできなかった。

だが、しかし。

（だけど……だからって俺に何ができるって言うんだ）

相手は化け物だ。手から火を出すなどただの人間ではない。

（奴には俺が見えている。いや、あの懐中電灯さえ消せれば……奴からは見えなくなるかもしれない。あれさえ消せたら逃げられるかもしれない）

もちろん少女を連れて。

「ま……待ってください……いや、ください……。わかった。俺は今すぐここを立ち去る。だから命だけは助けてください」

必死に救いを求めながら、彩人は男の出方に気を配りながらゆっくりと歩き出す。

「そうだな、まあ大目に見てやろう」

男からの返事に彩人は一先ず安心する。

（よし、このまま懐中電灯を拾い上げてあの子を……）

懐中電灯を拾い上げようと手を伸ばした時、熱風が横を遮った。

「熱っ……」

とつさに庇った腕をどけると空けた空間があった。

もちろんさつきまではこんな風になっていなかったはずだ。

そこには木々が何本も立っていて――

今やそこからは煙が立ち上り、積もっていた雪は忽然と姿を消し、残ったのは黒く焦げ炭と化した木々、残り火がところどころにあり、その光景を見えるように照らす。

「あ……あ……ああ……あ……ああ……」

「嘘を付くとは悪い奴だ。俺を見くびりすぎだ。全く、お前の行動などお見通しだよ。所詮、ガキの考えることだ。まあおもしろいから見逃してみただけだな」

再び男の手に炎が灯る。

「これでお前の置かれている状況ははっきりとしたか？お前にはもう助かる余地はない」

彩人はもう絶体絶命だった。唯一の逃げる手段——命の助かる手段は自分の手でつぶしてしまった。

「火葬<sup>かそう</sup>つて、この国もやっていただろう？　ちょうどいいな」

彩人はどんどんパニック状態になっていく。

「骨は残る程度の火力にしといてやるさ。あ、でも痕跡は残したらまずいか」

男の言葉は彩人の耳に入っていないかった。それどころではなかった。今の彩人にはもう何を言っても聞こえない。

「跡形もなく消す。それと後ろのそれはたぶん大丈夫だ。お前だけを消す。それは大事な回収物だからな。それまで消し飛ばしたら、俺が今こうして何のために働いているのかわからなくなる」

彩人はもう終わりだと思った。

（俺って何してたっけ？　俺は藍さんにお使いを頼まれ、コンビニ行って、それで帰ってきてるとこだった……よな？　どこからおかしくなったんだろう……。この子と会ってからか？　俺はただこの子を助けようとしただけだ。そしたらいきなり化け物みたいなのが現れて……それで……）

「悪いな、小僧」

口先だけの男の言葉に同情の念。そして男は最後の言葉を彩人に告げる。

「灰になれ」

男は彩人に向かって火を宿した手を振りかざした。

膝は制御できなくなった機械のようにガタガタと震え、避けようとする事すらできなかった。膝についてただ炎が迫り来る方を向いているだけだった。

橙色の光が彩人の視界を埋め尽くす。白い雪と黒い闇を染めるように。そして夜の銀世界は橙色へと塗り替えられていく。

## 一章（5） 彼の答え

（俺……死ぬのか？）

そう思った彩人は目をつぶった。恐怖から目を逸らしたくて。もう助かりようがない。

だが、いつになっても炎の熱は感じられなかった。

（あれ？ 少しも熱くねえ……。むしろ普通に寒いままじゃねえか……。さっきの雪の中を歩いてる時と変わらない。ははっ、もう死後の世界だったりして……。それが死体になって俺自身が冷たくなっただか……）

「防いだだどつ?!」

声が聞こえた。

彩人のものではない。

（何だ？）

驚いた声を上げたのは、炎を手で操る芸当を見せ付けた化け物のような男だった。

彩人はそっと目を開ける。開けることができた。それはつまり。

「生きてる……。俺……生きてるのか？」

（なんで？）

その答えは目の前の光景を見ればわかった。

炎は彩人を襲ってきていた。確かに。

だが。

「どうなっているんだ……」

炎は何か見えな壁のようなものでせき止められているように見える。

そして。

その炎が阻まれている——見えない壁の前に一人。

「……」

そこに立っているのは男ではない、ましてや彩人のはずもない。  
この場にいたもう一人の人物。

「さっきの……さっきの子なのか……」

そう、そこに立っていたのは銀の少女。

長い銀色の髪を揺らしている。

少女は見えない壁に手を当てている、否、かざしているとも言える体勢だった。

「あんなに弱っていたのに……」

彩人の言ったとおり少女は衰弱していた。目を覚ましてもずっとおぼろげな目をしていて意識がはつきりしていなかったというのに。「ふんっ、まだ動けたとはな……。それは予想の範囲外だ。さすがはB等級<sup>ランク</sup>だな。よくもその状態でも俺のD等級<sup>ランク</sup>の攻撃を防ぐことができる。万全の状態だったら俺は返り討ちにあつて、瞬殺されていただろうな」

（なんだ？ 等級<sup>ランク</sup>？）

男の言葉には、その世界に生きる者にしか理解することができない言葉が含まれているようであった。

「ねえ……？」

少女の声だった。小さく、とても弱々しい消え入りそうな声で少女は言った。

彩人は耳を立ててどうにかその声を聞き取る。

「な、なんだ？」

少女の口から出た一言は端的だった。けれどもそれは彩人の胸を強く締め付けた。

その言葉は。

「逃げて……」

（そんな……）

彩人は信じられなかった。確かに彩人にはこの状況をどうすることもできない。しかし、少女の先ほどの容体、消えそうな声、それ

らが少女だつて深刻な状況だということを彩人にわからせる。  
助ける側と助けられる側がいつの間にか入れ替わっていた。  
それは一瞬で。

「君は……君はどうするつもりなんだ！」

一瞬で助けられる側に移つてしまつた彩人はとても無力だつた。  
ただその異常な光景を見ていることしかできない。

「わからない……私は……いつまでもこうしていられる……わけじや……ない。だから早く。早くしないと……この壁が……もう……」

壁、という言葉に疑問を感じた彩人は目を凝らして見えない壁を見た。いや、完全に見えないわけではなかった。かすかにその場で炎よる光がぼやけて見える。

（溶けている？ あれは氷なのか？）

透明な壁は水滴のようなものがたくさん付いていて、それがたらたらと垂れていく。まさしく氷の造形物。だがそれはしだいに氷壁が徐々に薄くなつていく表れだつた。

「鬱陶しいぞあー！」

男が叫ぶと彼の怒りに焚きつけられてかのように火力を増す。  
それにしたがひ壁が融ける速さは早まる。

「彩人！ 早く逃げて！」

少女が彩人に告げる。かなり焦っている調子だ。

（……砕ける！）

彩人は直感で悟り少女に飛び掛かる。

壁が砕かれるのはその数秒後だつた。炎が壁を突き抜ける。

（避けられるか？！）

壁を突き破つた炎は次々と雪を食らい尽くしていく。そして彩人と少女がさつきまで居たところは雪もなにもなくなる。

彩人は少女の体と一緒に道の脇にある。

「だ、大丈夫か……」

彩人は少女に覆いかぶさるような体勢で尋ねる。

「うう……」

「よかった……生きてる……」

さっきの炎によって懐中電灯はお陀仏になってしまった。そのためさっきより暗くはなったが残り火が代わりに照らしている。

二人は何とか炎から逃れることができた。

だがそれで終わりではない。

「せっかくの逃げる機会だったのにな、小僧。それを自分で無駄に  
してしまうとは。もうお前が灰になるまでの時間は少ない。だから  
少し与太話でも混ぜて生きる時間を延ばしてやろう。小僧、お前は  
さっき俺のことを『化け物』と呼んだな？」

「……それがどうした」

「それも同じだ」

男は少女を指差す。

「この子も同じ……」

「そうだ。同じだ。この世界の異常。『異常』を。見ただらう？」

ブラウイタス

それがさっき氷の壁を作って俺の炎を防いだのを。だからそれもお  
前の言う『化け物』だ。まあ正確には『化け物』ではなく『アルター改変者』  
なのだがな。それを踏まえた上でお前はそれをどう思う？」

「……どう……思うだと？」

「危険だとは思わないか？」

根本的なことは男と少女は変わらない。どちらも同じ。普通では  
ない。異常だ。

「でも……」

彩人は唾を一飲み。

「この子は……違う」

「なぜ？」

「それは……」

彩人は返す言葉に困ってしまう。

「違わなくはない。同じ存在だよ、それは」

「……」

「所詮俺たちの生きる世界はお前達、一般人とは違う。じゃあそれ

はその中に入るか？ 入らないだろう。常識、法則、そんなものから外れたそれも俺たちの世界にしか入ることしかできない。お前はそれをどうするつもりだ？ お前達の世界で生きていくことなどできはしない」

「俺は……」

「情けをくれてやる。もう一度だけお前に選択肢をやろう、最後のだ。お前の命を守るか、それを守るか、お前はどちらを選ぶ？」

「俺は……」

彩人に与えられた最後のチャンス。男は少女を素直に渡せば命をとるまでのことはしない。少女を引き渡したら、醜く情けない姿を晒しながら逃げることになる。男の目的はわからずとも、そうすれば一人の少女を自分の身代わりにしたことだ。

だがこの機会を逃せばこの場で死ぬ。

（俺はやっぱ死にたくない）

真っ白な人生を送ってきたにも関わらず、これからもそのような空虚な日々を続けたいと思っているのだ。生きたいと思っているのだ。理由もなく。何も得ることはできないわかっていながら。

死にたくない。

生きたい。

だが。

これは彩人自身も本当にわからないことだった。誰かが彼に囁いているようだった。そして彩人自身もその囁きの選択は正しいと思えてしまう。

この選択で、もし違うほうを選んでいればこれからもずっと変わらない日々を送っていたのかもしれないのに。だがこの時の彼には初めから選択肢などなかったのかもしれない。『前』の彼でなくとも、八年前の『あの時』から答えはもう決まっていたのだとしたら。『俺はやっぱりこの子を守る』

それが彩人の出した答えだ。この答えが彼に『変化』をもたらず。（俺はこの子を守らなければならない。そんな気がする。そんな気

がするんだ！)

彩人はこの少女にはなぜか懐かしさを感じていた。だがそのようなことはあるはずが無いと改める。

「そうか……」

言葉とともに炎が出現。

「残念だ。お前達の世界とこつも触れ合ってしまったのだな。だいぶ回り道をしてしまったようだ。さっきのお前が言った言葉を忘れるな。それがどういう答えかちゃん理解したつもりで答えたはずだからな。もう容赦はしない」

男は無防備な二人に近づいていく。

「早く逃げるぞ」

彩人が少女の手を引っ張って立ち上がらせるために、手をつかんだその時。

(なんだこれ?!)

頭か体か、何かがダイレクトに流れ込むような異様な感覚が彩人を包んだ。

「次は先程みたいにうまくいかないぞ？ もうそれは力を使えないだろうからな。これで本当に最後……」

男は異変に気付く。表情が真剣な顔つきになる。

警戒しろ。

彼の直感がそう告げた。

「なんなのかわからんが……さつさと片付けた方がよさそうだ」

男の手に炎が灯る。今度の炎は今までの物とは形状が異なる。ただ手から燃え広がっている炎は徐々に細長くなっていく。最終的には矢のような形になる。今、炎を普通に放つたら少女までも巻き込んでしまうと思い、彩人だけを仕留めるにはこの形状が最も有効的だと判断した。

「はっ！」

男は炎の矢を彩人目掛けて解き放つ。炎の矢は一直線に彩人へ向かう。

少女の手を掴んでから微動だにしていなかった。体が固まっている。

矢が彩人に突き刺さりそうになる瞬間。

[illegible]

男が炎を放った時に橙色の光が夜の闇を満たしたように、今度は

そして男が目を開けた時には再び辺りは闇になっていた。さつきまでは残り火が暗闇を照らしていたはずだった。光が放たれた後炎もろとも消滅し、黒き闇に戻っている。

53

片手で頭を抑え、焦点も合わないまま地面を見ていた。

彩人と少女はまだ同じ場所にいる。無傷だ。

消えたのは彩人ではなく、炎の矢の方だった。

「これは……」

辺りは一変していた。

さっきまで焼かれて何もなかったはずの場所の地面が一面凍っていた。そこだけではない。彩人と少女を中心に辺り一体が凍りついていた。木々までも。

「小僧、何をした！」

男は彩人に尋ねるが、当の本人である彩人にも状況は掴めていない。

フラウイタスターゲット

「いやこの異常は標的のもので間違いない。まだそれに余力が残っていたというのか？ いや、だがもう限界だったはずだ」

男は彩人の方を睨む。

「まさか……この小僧がやったというのか？」

そんなことはあるはずがない、と首を振る。

「いや確かにこの氷はあれの力だ……。やはりまだこれほどの力を残していたということか……。侮れんな。B等級<sup>ランク</sup>はだてじゃない、ということか」

この時、男は気付いていなかった。

凍っているのは地面や木々だけではないことを。

「これは……体が動かないだ！」

炎を灯している右手から離れた部位は凍っていて身動きがとれなかった。

（どうしたんだ？ もしかして動けないのか？）

その男の様子を見た彩人は、これは二度とないチャンスだと思った。

二人と男の距離はまだ五メートルはある。

（今のうちに逃げるしかない！）

彩人は少女を再び抱える。

（あれは……）

二人がいる所に生えている木の脇に、コンビニで買った商品が入った袋が落ちていた。

（そうか！ あれを使えば）

彩人はそれも拾い上げて走り出した。

「くそっ！ おい、待ちやがれ！ 小僧！ こうなったら標的ターゲットに多少の火傷ができて仕方がないな。まとめてだ！ まとめて焼いてやる」

男は悪あがきで最初に使った火炎攻撃を今度は二人に向ける。

「そんな……！」

彩人は首だけ回し後方から迫る炎を見る。足は常に動かし続ける。

（このままだと食らっちゃう！）

少女を背負っていて、ただでさえ両手が塞がっているから、避ける余裕もない。

しかし炎は見えない壁に防がれる。

彩人は少女の方に目を移す。

「ありがとよ。助かった」

と、囁く。

少女はずっとぐったりしたままで反応はない。男の言つとおり、もう残りの力も少ないようだった。

「甘いなあ！ この距離でも俺の炎は届くぞ！」

留めだ、と言わんばかりの大声で男は叫んで今までで一番大きい炎を出現させる。

（このくらいか……）

彩人は立ち止まり少女を下ろす。

「ああ、そうだな」

そう。この距離なら。

彩人の目的は男と一定の距離をとることだった。

「この距離なら俺たちには被害はないよなっ！」

レジ袋に手をつ突っ込んで中身の一つを掴み取る。これは少女のよ

うに氷壁を作って防御のできない、ただの高校生でも可能な悪あがき。掴み取ったそれを思いつき男の方に向かって投げつけた。それは闇の中へ姿を消す。

男は一回り大きい炎を放射する。

「消えるおおおおおおお！」

「消えるのはお前のほうだ！」

二人の叫びが交錯した直後——爆発が起きた。

静けさの満ちた夜に爆音が響き渡り、爆風が雪を舞い散らす。

「うつ……」

彩人はすぐに少女の体を腕の中に収める。

必死で爆風から少女を庇う。

爆風に耐え切れなくなつた体が後方へと吹き飛ばされるが、今度は少女を手放すまいとしつかり抱えたままだ。そのまま雪の上につ伏せに倒れ、爆風が治まるまで少女を庇い続ける。

やがて爆風は止む。

雪の夜は静けさを取り戻した。

彩人は想像以上の結果になり完全にびびっていた。

（予想以上だ……）

彼は自分では気付いてはいなかったが冷や汗がたらたらと出ていた。心臓をバクバクさせながら爆発のあつた方を見る。

「……やったか？」

作戦が成功しても油断せず、彩人は警戒を解かない。爆発の起こつた方向をしばらく見続けていた。

「……」

男が追ってくる様子はない。

「ふう」

彩人は全身の力を抜いた。

「はは、はは……」

彩人は起こったことをただ笑うことしか出来なかった。

「これにこんなにも威力があるなんてな……」

レジ袋から男に向かって投げたものと同じ商品を手に取る。

彼の手にあるのはそう――ガスボンベ。

それが男に向かって彩人が投げたものだった。

辺りが暗かったおかげで、男はそれを確認することができなかったのが幸いして、そうとも知らず男はそれに向かって炎を放った。

結果、火がガスボンベに引火。

そして、ガス爆発。

藍に買ってこいと頼まれたものが彩人の命を守るための強力な武器となったことは事実だ。

「……俺はとんでもないことをしてしまったたんじゃないか？」  
とにかく必死だったので自分の行為がどれほど危険だったのかをあとあとになってわかった。

これは『絶対にまねしてはいけません』の項目に完璧に当てはまってしまうが、まあ結果オーライ。

彩人はそうまとめた。命がある。少女を守りきった。それでいいじゃないか、と。

ようやく気を落ち着かせるようになってきた。

「一体なんだったんだ……」

彩人に起こった出来事。それはたかだか数分の出来事だった。だがそれはあまりにも衝撃的だった。銀髪の少女との遭遇。その直後、自分は何者かに突然襲われ、少女を渡せと責められた。さらにはその男は手から火を生み出すなどという人間離れしたことをやってのける。その火は何度とも彩人を狙って襲い掛かってきた。

（俺、生きている、よな……）

彩人は今でもこの出来事を信じられなかった。

だが、これでもう安心。

脅威は去った、はずだった。

「よくも……よくもやってくれたなああああああ！」

怒り狂った叫び声さえ無ければ。

## 一章(6) 最後の言葉

彩人の安心は一瞬で恐怖に変わる。

[illegible]

男はゆっくりとした足取りで彩人たちに近寄ってくる。

「灰にしてやる！ 何の形をとどめることなくただ灰となれ！」

男が右手を天に高く突き上げて、その腕が炎の渦を巻く。次々と生み出される炎の渦は手の先へ昇り集約されていく。集約された後、炎は球体を形成。まるでコロナを纏<sup>まと</sup>う太陽のようだ。

（なんだよあれ……）

火炎球は大きさを増し続け、それを掲げる男の体よりも大きくなる。

これに当たつてしまえば本当にただ灰となるか、灰さえ無くなつてしまふのではないかとも思えてならない。

彩人にはどうすることもできない。

防ぐことも。逃げることも。

ここで少女に助けを求めたとしても、無理だろう。氷壁で防ごうとしても一瞬にして打ち砕かれてしまうのがおちだ。

窮地。

本当の絶体絶命。

終わり。

「図に乗るなよ、世界の『バグ』が」

三回の銃声。その音がした直後。

「がはっ」

男は口から血を吐き出した。

三発の弾丸に撃ちぬかれた彼は火炎球のコントロールを失う。制

御されなくなつた。火炎球は球体を保つことができず、無数の火の粉となつて散らばる。

彩人は少女に預けていたダウンジャケットをとつさに掴んで頭から被り、少女の上にかぶさるように彼女を庇<sup>かば</sup>う。

「くそ……。てめえら『OASP』の連中……か」

「これより改変者<sup>アルター</sup>の削除を行います」

乱入者の一人が言う。

彼らは全部で三人。二人は黒服に身を包みいかにも怪しげな人物で、残りの一人は装飾品だらけのチャラついた格好をしており他の二人と比べて若い。二十歳ぐらいに見える。

（助かった？）

彼らが男の動きを止めてくれたおかげで火炎球は防がれたが、彼らはそれを防ぐために拳銃を用いた。そのようなことをするならば一般人であるわけがない。

敵か、味方か。

まだ安心はできなかった。

「待て『T2』、部外者と思われる二名を確認」

「『T1』了解。どうされますか？ 木賊<sup>とくさ</sup>さん」

木賊。

そう呼ばれたこの集団のリーダーらしき人物は薄気味悪い笑みを浮かべてブレスレットやネックレスをちらちらと鳴らしながら、どうしようか、と顎に手をあて考える。

そして彼の口から解き放たれたのは。

「殺<sup>や</sup>っちゃえ」

「了解しました」

（なに！）

黒服の一人が拳銃を持ち近づいてくる。

「殺されてたまるか！」

そう叫んだのは炎を操っていた男だ。

炎を灯した手で黒服の男の顔面をわしづかみにする。

「があああっ」

炎で顔面を焼かれうめき声を上げる。

彩人たちに向かつていた黒服の人もそちらを向く。

「へえ、頑張るねー」

木賊は少し離れたところからこの現場を見物しているようだった。仲間がやられているのに、楽しんでるようにさえ見える。

「貴様らまで邪魔しやがってええええ！」

今度は男の周囲で渦を巻く。

もう一人の黒服は腕を組んで防御体制。男の攻撃は今ももう彩人たちに向けられていなかった。

「彩人……」

「き、君！」

少女はまた目を覚ましていた。まっすぐ彩人の顔を見つめている。

「今からルネが彩人を守るから」

「ルネ？　それが君の名前？　……っていつか守るってどういうこと?!」

ルネと名乗ったその少女はその場に立ち上がる。

彩人には今から彼女がしようとしていることがなんとなくわかった。彼女が使う特別な力でこの場を鎮めようとしている。残りの力がわずかだというのに。それには対価があるにも関わらず。

ルネは言う。

「いい彩人？　たぶん『今』の彩人にはわからないと思うからさ、ルネが変なこと言っているように聞こえると思うけど聞いてくれたらうれしい……」

「え？」

「また巻き込んだじゃって、ごめん。たぶんルネも次に目が覚めたら『今』のルネではなくなると思うから。もし、また危ないことがあっても大丈夫だよ。だって彩人には『世界を変える力』がある。だから諦めちゃ駄目だよ」

「それはどういう……って、ルネ待って！」

彩人の言葉を待たずにルネは前へ踏み出した。ふらつきながらも前へ。彩人から離れていくように前へと。

「彩人。最後にまた会えてよかった」

ルネは最後に彩人の方を振り返り――初めて笑顔を見せた。だがそれはどこか悲しげで。

次の瞬間。

とても綺麗な銀色の光がその場をを包み込んでゆく。

銀色の光が彩人の視界を覆う。

「チッ、あいつも改変者<sup>アルター</sup>だったか！ 『T1』『T2』引き上げだ

！」

これから起こることの危険性をいち早く察知できたのは新たな乱入者のうちの一人、木賊だった。部下二人に退却を命じる。

（眩しい……）

彩人はあまりの眩しさに目を開けることができない。この光の中で何が巻き起こっているのかまったくわからない。

やがて光は収束を初め、また元の暗闇へ。先ほど火炎球による火の粉が無数に飛び散って周囲の木々に燃え移っていたはずなのに、今は蠟燭<sup>ろうそく</sup>のように軽く枝などに火が灯っているだけだった。

光が消えた時には全てが終わっていた。

炎を操る男も、新たに乱入してきた謎の三人組も姿はなくなっている。

この場に残されたのは彩人を除いて一人だけ。

「ルネ！」

その場所に残されたのは銀色の髪の少女。彼女の体力尽きたように倒れた体の上に天から粉雪が舞い降りる。彼女と似たその雪は彼女の体を溶け込ませて、このままでは彼女を覆い隠してまいそうだった。

彩人は急いで少女の元に駆け寄った。そして抱きかかえる。

「大丈夫か！　おい！」

声をかけても少女は目を覚まさない。あの光は間違いなく彼女が氷を出現させたように、何か特別な力を使つて引き起こしたのは明らかだ。おそらく余力を全て使い果たしたのだろう、と彩人は思う。

（とにかく早く連れ帰ろう！）

彩人はルネを背負い新代荘へ急いだ。

## 一章（7） 週末の終末

新代荘に着く頃には午後九時半を過ぎていた。

「藍さん！」

彩人は少女をおんぶして両手が塞がっているため、ドアを開けることができず、部屋の中にいる人に開けてもらおうと、藍を呼ぶ。

「藍さん、開けて！」

扉の向こうでバタバタと足音が鳴る。足音が止んだ後、ガチャツ、と扉の反対側で鍵を開ける音が。

「うっさいわよ！ ご近所の事も——」

「藍さん！」

何よ、と藍の声がして扉が内側から開く。

「早くこの子を！」

藍は彩人の背に目を落とすルネを見る。

「——！ なぜここに……」

「この子、すごい弱ってて。俺が帰ってくる途中で倒れていて……、って藍さん聞いてますか？」

藍は少女を見るなり、驚きの表情を崩さず、そのままずっと少女の方を見続けていた。彩人の話は耳に通っておらず、それより別の事が重要な事態だといったかのようなのである。

「どうかしたのー？ 早くご飯ー。もう峠を過ぎちゃったよ」

部屋の奥から、食事はまだかー、早くしろー、と若葉の待ちわびたという言葉が飛んでくる。

「あ、あそうね……。急いで部屋へ……」

彩人は藍の後を着いて行く。室内は外とは比べ物にならないほど暖かい。

だがこれで安心だ。ここまで来れば、ルネも温まることもできるし、炎の男や黒服の男たちのような者は襲ってこないだろう。

（これでもう安心――）

「不審者が現れたわ！」

「はあ?!」

彩人が口を開ける。

「なんだって?!」

若葉と幸祐が驚きの声を上げる。彩人も心の中で同じ事を叫んでいた。

（まさか、藍さんはさっきの出来事の事を知っているのか?!）

「彩人がとうとう少女誘拐を犯したわ！」

「はあ?!」

またも彩人の口が開く。

藍は相変わらずであつた。

彩人はその様子を見てさっきの違和感など気に留めなくなった。

そのようなことよりもっと重要なことはいえ――

（なんで俺が不審者扱いされるの?!）

何だと、と彩人と藍が丸机の置かれた部屋に入るより先に若葉と幸祐が飛び出してきた。

「え、なにこの子！ え、えっとこの子……外国人？」

「そうとしか言えないだろう……」

若葉と幸祐の二人は少女の綺麗な銀髪に戸惑っていた。

「それより早くこの子をなんとかしてあげて……」

彩人は新代荘に帰ったらすぐさま藍たちが行動してくれるだろうと思っていたのだが。

（扉を開けた時から何故か迅速にほいほいといかないんだ。今はそんなことをしている場合じゃない）

と、不満が溜まっていた。

「若葉は部屋に布団を敷いて、できるだけたくさんの毛布とか用意して」

「あ、うんわかった」

「彩人、その子を」

「あ、はい……」

彩人が藍に少女を託すと、藍は部屋に入っていく。

「藍さん、俺は何かやることありますか」

役割の与えられていない幸祐が協力を志願する。

「そうね、とりあえず彩人を取り押さえとして」

「だから何で?!」

困った様子で幸祐が彩人に近づく。

「……だそうだ」

「だそうだって……おい! マジでやんのかよ!」

「いやー、そう言われちゃったから……」

「言われちゃったからって……」

ちなみに今の彩人の状況説明をすると、腕をとられ、顎は床につき、がっしりと幸祐に取り押さえられている。

彩人は暴れたが逃れることはできないと悟り、おとなしくなる。

それを見計らって、彩人よりさらに状況が理解できていない幸祐が気になっていることを聞く。

「ところで、あの子、どうしたんだよ?」

「あの子は……」

言葉を詰まらせる。

(あんな事があったなんて話せるわけがないからな……)

「あの子は道で倒れてたんだよ……。それで俺が助けてここまで運んできた」

間違ったことは言っていない。

彩人が少女と最初に出会ったのは狭い路地だったし、助けたのは事実だ。

「そうか、色々大変だったな」

「ああ……」

頭を、あの男、あの黒服たち、そして最後にあの少女の事が過ぎ

る。

「大変だったよ」

その言葉はより重かった。

「なあ、幸祐？」

なんだ？ と、幸祐が聞きかえす。

「そろそろ放していただけないでしょうか？」

「ふむ」

彩人の腕を背中に回してしっかり固定していた幸祐の手が放れる。  
（こいつ、見た目と沿わずに案外、力強いんだよな。まあ部活で鍛えているんだから当たり前か）

彩人は立ち上がって部屋に向かいルネの様子を見に行く。

「容態は？」

ルネは布団の中でぐっすり眠っているようだった。

「そうね。やっぱり体がとても冷え切っていたわ。とりあえずこのまま暖かくして安静にして置きましょう」

「この子の髪、綺麗だね」

若葉がポツリと呟いた。

彩人は今こうして改めてみてもそのルネは綺麗だと思った。最初に会った時、気を失っていた時の彼女の顔はつらそうな顔をしていた。しかし、今は苦しみから解放されて安らかに眠る姫のようだ。

彩人はその様子を見てほっと胸を撫で下ろす。

「さっ、この子はたぶんもう大丈夫でしょうから、私たちは食事よ、食事」

藍がぱちんと手を叩いて、空気を切り替える。

「そうじゃん！ 晩御飯まだじゃん！」

「もう空腹の山をとくに通り過ぎた……けど、やっぱり空腹に変わらない」

「つーか俺、めっちゃ寒い」

ガタガタと彩人の体が高速振動する。

「俺、先に風呂入りたい……」

その言葉が皆の忘れていたことを思い出させる。

「そういえば、風呂も駄目だったわね……」

「……今日どうするの？」

「明日までには何とかしておくから今日のところは我慢して」

「母さん、この借りはきつちり返してもらっからね……」

若葉の怨念おんねんに満ちた視線が藍を突き刺す。

「……さあ、鍋作るわよー！」

「聞いてないな……」

その後、四人で鍋を作って食べた。

彩人は鍋のおかげで何とか体を温めて持ち直すことに成功。

四人で鍋をつついていている間にルネのことについて炎の男や黒服のことは避けて説明を終えておいた。

ごちそうさまでした、と四人で手を合わせて食事を終える。ルネが起きた時の為に鍋の具は少し残してある。

「じゃあ今日はこれでお開きね」

四人とも丸机から立ち上がる。

「じゃあ、おやすみー」

「おやすみ」

若葉と幸祐が各自、自分の部屋へと戻っていった。

「彩人、あなたも自分の部屋に戻りなさい」

「ああ……うん」

彩人は少女の事が気になって、まだ彼女が寝ているそばにしゃがんでいた。

「ルネのことは、後は私に任せなさい。明日は学校でしょう？」

「わかった……」

渋々、彩人も自室へ戻ることにした。

彩人は自室に入るなり朝からたたんでいなかった敷布団に寝転がる。

「夢じゃないもん……」

今日の出来事を振り返っていた。

（お前達とは違う世界）

男の言っていた言葉を思い出す。

（あの子はこれからどうなるんだろう。俺たちみたいに新代荘で暮らすのかな）

彩人が新代荘に初めて来た時の事。

あの時の俺はどうだったっけ、と思い出そうとしてみるがいまいち思い出せなくて断念する。

（あの子は……俺たちの世界では……生きていくことはできないの  
だろうか……）

そのまま眠りへ落ちていった。

## 一章（８） 週末の延長

ここは『〇〇一号室』、新代藍の部屋。

藍は少女が寝ている横で座っていた。もう彩人たちが帰ってか  
らずつとこうしている。今頃彼らはもうおそらく皆眠っているだろ  
う。

「やっぱり……この子なのね」

藍はその少女の名前を独り呟く。誰に語りかけるわけでもなく、  
いや自分自身に語りかけているのかもしれない。

「また……私たちはあの世界に戻らなければいけないのかもしれない  
いわね……。もう二度と関わらない。もうあの子達を巻き込まない  
私が守ってみせる。そう心に決めたとつもりだったのにね……」

独り言は続く。

「この子がなんでこんなところにいるのか確かめなくちゃいけない  
わ。もし奴らがこの町にまた……。また狙いに来ているのだとした  
ら……。いや、それは不自然すぎる。この子が一人でいるってことは  
ありえないわよね……」

藍はルネの頬に優しく手でなでる。

「二度と関わらないって決めたけど……」

藍は立ち上がって電話の前に行って受話器を取る。

「やっぱり気が進まないわね……」

受話器を取ったものの電話番号を押そうとしない。

（あー、もう！ あいつに掛けるのか！）  
頭を掻く。

「これはあの子達のため！」

決心して電話のボタンを押していく。その電話番号にはもう何年  
も掛けていない。昔の知人であり、それ以上に仲間であった者の元  
へと電話を掛ける。

ブルルルル、と五回ぐらい鳴って、もしかしたら出ないのではな

いかと、期待してしまっただ、期待はすぐに打ち切られる。

『もしもし?』

男の声。懐かしい声だ。

『久しぶりね……』

藍は気乗りしない調子で語りかけた。

名乗ってもいないのに電話の相手はすぐに理解したらしく、

『ああ久しぶりだね』

と、返事は藍と相反して明るく、うれしさを隠しきれていないのが軽やかな調子だった。

『どうしたんだい突然? もう二度と掛けてこないと思っていたのに。まあ一応こちらの電話番号は変えておかなかったのは正解だったね。変えてたら君はこうして僕に掛けることはできなかったんだからね』

『ええ、二度と掛けるつもりは無かったわ。あなたの声も二度と聞きたくなかった』

『ひどいなー。どうだい最近。子守で忙しいかな?』

『あの子達はもう高校生よ』

藍はそっけなく答える。

『ほう、たくましくなったもんだな』

『それより……』

『君は今でも昔みたいに綺麗な』

電話の相手は久しぶりに藍の声を聞けたので心が浮いているようだった。

『いいかしら?』

『はいはい。せっかくの何年かぶりだっていうのに』

『八年』

『あの子の時が最後か、なんて言っただけ、白上彩人、君?』

『本当、あなたは鬱陶しくて憎たらしいわ』

『そうさ。間違っただけよ。で。』

電話の相手は一拍おく。

『何があつた？』

先ほどまでの浮かれたトーンも話し方もどこかへ消え去ってしまったかのように、真面目になる。電話越しにぴりぴりとした空気が伝わる。

藍は本当にこいつに話していいものかと躊躇う。昔からどこか食えないところのある男だった。迷っているうちに電話の相手のほうから話を振ってきた。

『ヒンター来訪者のことかな？』

藍はその言葉を聞いて背筋に寒気さむけが走る。

（勘の鋭いやつめ）

相手は大方、こちらの話そうとしてることを読んでいるようなので、包み隠しても無駄だと判断した。

「ええ、そうよ。『あの時』の続きが始まるかもしれないわ」

## 二章（１） 異常は何処へ

「朝か……学校……面倒くさ……」

一週間の始まりの朝に出た第一声。

彩人<sup>あやと</sup>は学校をサボりたい気は山々なのだが、そのようなことをしたら後々（藍）が恐ろしいのでそれは許されない。

起きようとして肩までかかっていた掛け布団をばさつとどけた途端に、冷気は容赦なく忍び寄ってきた。

「寒い……」

再び掛け布団を手にとって被り丸くなる。

部屋には暖房器具として電気ストーブが一台ある。これが唯一の暖房器具だ。後は厚着するとか毛布を肩にかけるとかで毎年冬を乗り越える。新代荘の他の面子も例外ではなく、皆このように今年の冬も過ごしている。

電気ストーブのスイッチを入れたまま寝るのは何かしら危険があるといけない（電気代の軽減もある）ので睡眠時は使用禁止というのが新代荘の規則の一つにある。

そのため朝になれば室内は完全に冷気でいっぱいに満たされて、冷蔵庫のようだ。

今日も寒いのだろう、とカーテンの閉まっている窓の方を布団の中に窺いながら見ていた。

このまま布団のぬくもりに包まれているところから、冷気を遮断するベールを取り払ったら、温度差の影響を多大に受けてしまう。

だから彩人は掛け布団を体に巻きながら立ち上がりカーテンを開けに向かう。

カーテンを開けてもぽかぽかとした朝の日差しはやはり拝むことはできなかった。

「今日も晴れないなー」

本日の空に青色なし。

本日も、だ。

灰色に少し薄みがかった感じである。雪は幸いにも降っていない。先週から色見市上空にある雪雲は少しずつ変化していたようだ。何日かすれば、お日様も顔を出すであろう。

外の様子を確認した彩人は時計を見る。時間にあまり余裕は無さそうだった。

藍の部屋へ朝食をとりに行かなければならないので、布団を外して着替えを終えた後、藍の部屋に向かう。

「おはようございまーす。ううつ……寒いっ」

新代荘の各部屋はそれぞれ別の住戸となっている。そのため部屋の移動は必ず一度は外に出なくては行えない。

外の寒気は室内の冷氣に劣ることなく、よりいっそう強烈なものだった。

「遅かったわね。遅刻しても知らないわよ」

彩人が起きてくるのが遅かったので味噌汁が冷めてしまったのを藍は台所で温め直していた。彼はまだちゃんと開かない目をこすり、ふらつきながら丸机のある部屋の奥へと歩いていく。

「あ……」

机の横に布団が敷かれている。

そこには眠っている銀髪白皙の少女。

今、彼女は若葉の服を着ている。

（そう……だったな……）

彼女を見たことで昨日の出来事が脳裏に蘇る。

夢ではなかったのだと。

それは実際にあったこと。

日常ではない——非日常。

それは一夜のことであり、朝はいつも通り。彩人が望んでいる日常である。

藍がお盆の上に朝食を乗せて運んできた。味噌の香りが伝わってくる。

「ルネは、あれからどうですか？」

第一に藍に尋ねておきたいことだった。彩人はそう尋ねつつ、ルネの顔が見える位置に座る。

藍はお盆の上の朝食を丸机の上に並べ終える。

「あなた達が自分の部屋に帰った後に一度目を覚ましたわ」

「本当ですか?!」

今の彩人にとっては何よりの吉報だった。

(あの状態からよくがんばったな)

彩人はルネの方を見て微笑む。

「ほらその子を見てにやけている場合じゃないでしょう?」

「にやけてないっ!」

「さっさと学校行きなさい」

「今日学校、あるの? 昨日あれだけ雪降ってて」

「なに馬鹿な事を言っているの? 幸祐も若葉も部活の朝練習で六時くらいにはもう出て行ったのよ。あんたも見習いなさい」

部屋の隅にある箒<sup>たんす</sup>の上<sup>たす</sup>に置かれた時計は七時を三十分を過ぎていた。

彩人は学校の事などはどうでもいいから彼女のことを色々と聞きたかった。

「この子が起きた時どう?」

「起きたのはあなたたちが部屋に帰った後、そうね……十二時は過ぎていたわね。様子は……ぼーっとしてた」

「ぼーっと、って……」

それは彩人を少し不安にさせるような発言だった。

「とりあえず何か食べさせた方がいいと思ったから、鍋の残りもちやんと食べさせたわ。まあその後すぐ 寝ちゃったけど」

「なにか言ってた?」

「とくに何も。聞く暇もなかったし」

「そう……」

(まだ本調子じゃないのかな?)

藍の口元が少し上がる。

「なに？ やっぱりその気があるわけ？」

くすくす、と藍が微笑を浮かべる。

「そういうわけじゃないって！」

「ふふ、まあいいわ。そんなことよりさっさと食べちゃって。洗い物するから」

彩人は朝食を口の中へ急いで掻き込んで、ささっと済ませ学校へ行く支度する。

「じゃあ、ルネをお願い」

「はいはい、任せておきなさい。いつてらっしゃい」

藍はしつしと追い払う仕草で、ルネを気にしてばかりいてぐずぐずしている彩人を新代荘から追い出す。

そして追い出された彩人は気乗りせずに登校している。

昨日嫌と言うほど夕方まで降り続けていた雪は道路に積もっている。道の真ん中は車が通ったりして積もった雪が削り取られ、タイヤ痕が残っている。道の脇にある水路の近くはそのままの状態だった。

（ルネ、大丈夫でよかった……）

想像の世界だけで起こるような出来事が終わった後、ルネの体は昨日、氷のように冷たかった。本当に命が危険だったかもしれない。彩人は新代荘を出る前に彼女の手を優しく握ってみた。その時にはちゃんと人の温かさが伝わってきた。そのおかげで不安は一先ず消え去った。

彩人たちが通っている高校——帆布南高校はごく普通の公立高校だ。一応進学校ではあるがレベルの高い大学を目指せとまでは、勉強に力を入れているという気は感じられない。彩人にとってはとても過ごしやすい環境であった。

学校までの道のりは新代荘から北東に向かって徒歩二十五分。昨日行ったコンビニといい、どこかへ行こうとするとどうしても時間がかってしまう。さらに交通機関が通っているわけでもない

ので徒歩で移動するしかない。自転車さえあればそんな苦労はないのだろうが、生憎新代荘にはそのようなものを揃える経済的余裕はない。

住宅が建ち並ぶ道を抜けると橋の手前までやってきた。

学校へ行く途中に川が陸地を隔てているので、橋を渡らなければならぬ。この橋を渡ると新代荘周辺のような築五十、六十年といった古い家屋に比べて築二十年未満の比較的新しい住宅街がある。道路も白線できっちり分けられている二車線の車道になる。

川は彩人が歩いてきた道の周りの田のように凍ってはいない。滔々と流れる水はいかにも触っただけで手がその冷たさで痛くなりそうだった。

橋からは家々が建っているところより高い土地になっており、普段は違うのだがどの建物も白い屋根だった。

橋を渡り終わると新代荘が建てられた地域より新しい住宅街に差し掛かる。その中を進んでいくと店も見かけるようになってくる。ランドセルを背負った子供たちが集団で登校しているのも見かける。

「ガキだなー」

三人の小学生が雪球を作って投げ合っていた。

対して大人たちは雪かきで大変そうだ。家の駐車場や車の上に乗った雪をせっせと下ろしている。その駐車場の傍らには、一メートルはあるだろうか、雪だるまが作ってある。

「そっかいや今年はまだ作ってなかったか」

数日降り続けた雪は降っていた期間と同じくらい溶けるまでは時間がかかりそうなのでまだまだ間に合う。

空はまだ青空を見せる様子はない。空一面に灰色の膜が覆っている。

そんな晴れない空を見ても仕方がない、というよりは、彩人はルネと名乗った少女のことばかりを気にして歩き続けていた。

「何者なのだろう……」

帰ったら聞いてみるか、とまだ登校している途中だと言うのに、早く学校が終わりと思いつけている矢先のことだった。

「彩人おおおおおおおおおお」

唐突に大声で自分の名前を呼ぶ声。

「？」

彩人は呼ばれた方を振り向いた。

「ぐはっ！」

彩人は振り向いた瞬間、顔面に痛みと冷たさが染み渡る。

何だよ、と心の中で愚痴を言いながら顔についた雪を払う。

「ほれ、どうしたそんな暗い顔して！ もう一発いくぞ！」

目を開けると自分目掛けて雪球が飛んできていた。

「おっと」

それを横飛びして避ける。

路面は凍っていてとても滑りやすくなっていた。

「しまっ……！」

彩人は足を滑らせて完全にバランスを失い、不覚にも転倒。

「くっそう……」

人がよく通る歩道を歩いていたのでふわふわな雪は積もっておらず、クッションのように働いてくれなかった。

「ふん、どうだ」

尻をさすりながら地べたに座っている彩人を、腕を組み俯瞰している人物は、雪球を片手に持っていた。

先ほどの無邪気な小学生たちではない。彩人と同じ制服を着た高校生だ。

「ノツキー、てめえ何しやがる……」

彩人に呼ばれたノツキーと称された高校生男子はニヤニヤと笑みを浮かべている。

「いやあ、なんか彩人がぼーっとして歩いてるからな、ついぶつけたくなっちゃった」

本名、波瀬<sup>はせ</sup>乃樹。

彩人と同じく南帆布高等学校に通う生徒で彩人のクラスメイトでもある。彩人とは中学校の時から付き合いで、今彩人が歩いている住宅街に住んでいる。やんちゃな小学生のような面影を感じさせられるが彩人よりは少し背が高い。

「顔面ヒットしたんだぞ！」

「それはすまなかつたな」

棒読みで誤る。これは昨日、藍に同じようなことをやられたばかりだ。

「覚悟しろっ！」

彩人はひそかに後ろで作っていた雪球を乃樹に向かって投げつける。

だが。

「フツ、甘いな」

乃樹は一步後ろに下がり、悠々と雪球を避ける。雪球は何も無いところへ飛んで行く。そしてその場に彩人を置いて学校の方へ歩き出した。

「逃げるのか！」

「仕返しをしたければ追いついてみる」

乃樹は尻を叩き彩人を挑発する。

彩人が立ち上がると同時に乃樹も走り出した。

「待てや！ このやろう！」

雪球二個分の雪を確保して、作りながら走る。その間も乃樹は逃げ続ける。

右手にある雪球を投げつけた。

前方を走っている乃樹はそれを避けて先ほどの彩人と同様、滑つて転倒。彩人はそれを見逃さず、顔面目掛けてもう一方の雪球をぶつける。もちろん顔面目掛けて。

目には目を齒には齒を、である。

そういうことで、これにて仕返し完了。

しかしその後も乃樹が再び攻撃し出したので、彩人も反撃し、と

いう小学生たちと同じことを数分間続けていた。

二人とも体を動かしたため、体は温まっていた。度を超して汗まです掻いてしまっているが。

今は二人の同意で休戦状態になり、普通に大人しく、高校生らしく登校している。

「あ、そういえばさ……」

乃樹が先に話を切り出した。走り回っていたせいで息が切れてしまっている。

「なんだよ……」

「噂で聞いたんだが昨日、火事があったの知ってるか？」

「……」

彩人は瞬時にわかった。

知っている。

知っていて当然だ。何せその事件の関係者なのだから。

「へ、へえ……」

「でさあ、その火事がさあ、あの向こうの方の雑木林で起こったらしいんよ。それが結構でかくてさ、雑木林にぽっかりと空いた木々も何も無い場所がでちまつたらしい」

乃樹はそう言っただけで昨日彩人がコンビ二へ行く途中に通った方向を指差す。

ドンピシャだった。

「けっこう近いんだな……」

「例の放火の件じゃないかって言われてる。そんな人がめったに立ち寄らない場所で炎が出るわけがないだろう？ だから放火だろうってさ、恐いよな」。例の不審者と同一人物なのかね」

「さ、さあ……」

彩人は知らないふりをし続ける。自分が関わっているなどとうてい言えないからである。

（そんな放火なんていう軽いもんじゃないぞ？ ただの放火魔じゃないからな。手から炎出しよった。あんな奴は人間じゃない……いや、

これはいいや」

「捕まるといいよな、犯人。意外と大事みたいで警察も色々と動いてるらしい。火を放っただけじゃなくて、その火事では爆発もあったみたいなんだよ」

爆発。

彩人の肩がびくつ、と敏感に反応する。

「爆発物まで持ち歩いてるとか、放火魔から爆弾魔にランクアップだぞ」

乃樹は噂話を続ける。

彩人は心配していた。

（え……何かこれやばい？ 爆発物って俺があの時投げたガスボンベのことじゃないか？ もしそうだったとしたら、その爆弾魔って俺になっちゃうじゃねえか！ いや……でも、よく考える、俺。炎を使っていたのはあの男のほうだったし、もとはといえばあちら側に問題があるわけであって……俺に責任はない。そう自己防衛だ！俺は悪くない。警察に捕まることなんて……あるはずが……）

「おい、彩人大丈夫か？ 顔色が悪いぞ？」

彩人がずつとうつむいて一言もしゃべらないので、乃樹が心配になって、ひよつとしたら体調が悪いのか、などと思っていた。

「ご、ごめんなさい！ それだけは勘弁してくださいっ！」

彩人は乃樹に土下座ポーズをとっていた。さらに両手を差し出していた。

「お前……どうした？」

乃樹はそのような彩人の姿を見て一歩後ずさりしていた。

（え？）

ようやく彩人の頭が状況に追いついた。

「うおおおおお！ 俺なにしてたんだあああ！」

「彩人、どこだ、どこが悪いんだ？ 頭か？ そうか頭なんだな？」

よし俺が一発、お前が正気に戻ることを祈って拳を叩き込む！  
戻ってこい彩人おおお！」

「正気だ！ あほが！」

乃樹が拳を振ろうとしたところへ彩人のカウンターが炸裂。  
カウンターは腹部へ。

「ぐっはっ」

乃樹が腹を押さえて蹲る。

「く……よかった……正気のように……だ……な……」

「あ、ごめん……」

彩人は正直、ここまで強く力を入れたつもりはなかったのだが運悪くいい具合（この場合は悪い具合の方が正しい）に決まってしまうたらしかった。

まだ学校に辿り着いてはいなかったが、学校のある方角から予鈴が聞こえてきた。

予鈴の五分後に鳴る本鈴に間に合わなければ遅刻となる。

現状、乃樹が負傷中。

いつもなら構わず置いていくのだが、今回は自分に原因があると思っただけは止めにした。

彩人は乃樹に肩を貸して、二人は学校へ行った。  
もちろん二人とも遅刻だった。



その日の授業は教室移動の必要のないものばかりが集まっていたため、朝来てから席を一度も離れていない。

彩人の席は窓側、教室の後ろから二番目に位置している。

そこからはグラウンドが見え、体育の授業で寒い中、上は体操着一枚、下は膝までの丈のズボンといった格好で生徒たちが走っていた。

彩人は、数学教師がチョーク片手に黒板を数式で埋め尽くしている最中、ぼんやりと窓の外を見続ける。

決してグラウンドを走っている女子を見ているわけではない。

「なあなあ、雨ちゃん」

彩人の後ろの席に座る乃樹が先生に気付かれないようにひっそりと隣の席に座る雨夜（あまや『あめ雨ちゃん』という愛称は乃樹が命名）に話しかける。

「ん？ どうしたノツキー」

雨夜は小首をかしげながら乃樹と同様に小声で聞き返す。

「どう思う？」

乃樹はこれこれと、ずっと窓を見続けている彩人を指差す。

「？」

雨夜の首がさらに右へ傾く。彼女の最大の特徴であるといえる、末端をゴムで縛られた長いサイドテールが床についてしまいそうなほどだ。

雨夜は彩人の方を見る。

「駄目だねー、彩とん、体育の授業をしている女の子に気を取られるなんて」

「いやそうじゃなくってさ」

「？」

またサイドテールが地面に付きそうになる。

「今日なんか、様子がおかしくねえ？」

「ああ、確かにそんな感じするねえ」

「朝っぱらから何か暗いつていうか……考え事してる感じだった」  
「そうだね……」

ふむふむ、と顎に手を当て考える。

「最近、彩とんの周囲で変化は？」

「変わったことか……んー、いつも通りでぐーたらしてるなー。あ  
っ！」

乃樹が大声を出してしまった。

「しー」

雨夜が人差し指を立てる。

「チョークを持つ手を止めた数学教師が「どうかしたか？」とやか

ましいという意味をこめた上で言ってきたのを、乃樹は「消しゴムを落しました」と言ってやり過ごす。

「で、変化って？」

「先週の金曜日のことなんだけど、これがな……」

「なにになに？」

「掃除を真面目にやってたんだよ、こいつ。すごくね？」

雨夜の目が半目になる。

「なーんだ……」

「あれ？　そういうことじゃないのか？」

「ノツキーは鈍感だなー、もう。そうじゃなくってさ、あれはズバリ」

「ズバリ？」

「恋、だね」

探偵っぽく決めようとした風に言う。得意げな顔で白い歯がチラリと見え、Vの字に開かれた親指と人差し指が顎に当てられている。

「さいですか……」

今度は乃樹が半目になる。

「春の到来だ！」

うんうん、と納得したように雨夜は頷く。

「それは……あるのかねー。こんな窓の外みたいに冬真っ盛りだと思っけどなー。一緒に住んでる若葉ちゃんも幸祐の方に気があるんだろっし」

乃樹は中学時代から彩人の周りで好きな人とかの噂が全く立ってはいなかったのを思い出す。

「あの二人付き合ってるのか、付き合っていないのか未だにはつきりしないよね、まったく。というかその話は置いておいてー、あれ？　あまりその気はしない？　私は恋わずらいで間違いないと思ったんだけどなー。窓の外を見ながら、『寒々しい景色だなー』とかで自分の気持ちとのギャップ差に落ち込んでいるんだよ。ギャップ萌え！」

「いや、ギャップ萌えって意味わかんないし」

「彩とんは多分心の中で『フッ、そうか……どうやら俺の方が来るのが少しばかり早かったよう、だな。恨むなら気温を上げようとせず雪ばかり降らせる天にしな（キラッ）。』とか、そんなふうに思っちゃってるんだよー」

「そんな彩人……きもいな」

「うん……ま、まあノリと言っやつだよ。実際にそんなことを言う彩とんを見たら、爆笑か白<sup>し</sup>けるかのどっちかだよ」

彩人の様子がいつもと違うことに乃樹と雨夜は、様々な想像を膨らませて二人で盛り上がっていた。その会話をしているうちに刻々と時間は過ぎてゆき、授業終了のチャイムになる。学級長が起立の号令をかけて礼をした後、彩人は着席せずにそのまま、二人のほうを向き。

「勝手な想像すんな」

「あはは、聞こえてましたか……」

乃樹と雨夜はぺこりと小さく頭を下げる。

彩人は教室の外へと出て行こうとする。

「彩人！ どこ行くんだよ！」

乃樹が立ち去る彩人の後姿に尋ねる。

彩人は、トイレだよ、と言って出て行った。

「聞かれちゃってたねー」

あはは、と困った表情の雨夜が乃樹の隣に立つ。

「やつぱり、何かあるな」

「ちよつくら探りいれてみますか？」

内密の企てをする二人であった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8448y/>

---

転変世界のプラヴィタス

2011年11月29日15時53分発行